新約聖書における ἐπίσκοπος についての一考察

―― 教会形成におけるリーダーシップ理解の一助として ――

松　見　　俊

はじめに：問題提起

20世紀の終わりから21世紀初頭に向けて，教会形成における牧師の「リーダーシップ」の重要性が叫ばれるようになった[1]。リチャード・ニーバーはす

1　Lloyd M. Perry は，北アメリカでの状況を「教会内の良きプログラムのために要求されている 3 つのことがある。第一に，リーダーシップ，次に，リーダーシップ，そして第三に，リーダーシップである。リーダーシップの欠如は，ある特定の年に，平均 8 つの新教の教会が毎日消滅しているという事実の主要な原因であるのかもしれない。教会はもっと多くのメンバーを必要としているのではなく，もっと多くのリーダーを必要としているのである。」と語った。（Getting the Church on Target, Moody Press, 1977, 73）また，英国バプテストの神学者 P. ビーズレーマーレーは「われわれは学際的神学に背中を向けているのではない。むしろ，われわれは神学をして教会の僕としたいと願っているのである。神の教会は，ミニ神学者ではなく，神学的に考えられるリーダーを必要としているのである。」そして，「牧師たちはリーダーであるべく召されているのである」と言う。(Paul Beasley-Murray, Dynamic Leadership. Rising above the Chaos of the One-man Band. MARC, 1990,10) その他，Ted Engstrom, The Making of a Christian Leader, Grand Rapids, 1976, Arthur M. Adams, Effective Leadership for Today’s Church. The Westminster Press, 1978, Peter Wagner, Leading Your Church to Growth. Regal Books, 1984, Steve Burt, Activating Leadership in the Small Church. Judson Press, 1988, William R. Nelson, Ministry Formation for Effective Leadership. Abingdon Press, 1988, David Stark, Christ-Based Leadership. Applying the Bible and Today’s Best Leadership Models to Become an Effective Leader. Bethany House, 2005. Ted Engstrom & Paul Cedar, Compassionate Leadership. Rediscovering Jesus' Radical Leadership Style. Regal Books, 2006.

でに1970年代に，「牧師は困惑した職業である」と悲観的に論評したが[2]，すでにこの時点で，世俗化あるいは世俗主義の荒波の中で，教会は何をするところなのか，牧師の仕事とは何か，が不明確になっていたのであろう。このような事情は，W.E.オーツの『現代牧師論』においてすでに意識されていた[3]。オーツは，牧師の職務として，説教，牧会，祭司（礼拝のデザインと司式，冠婚葬祭の司式？），教育，組織，管理を上げて[4]，それらの働きを「統合する牧師の自己認識」の必要性について論じている。そして，このような牧師の仕事の不明確さが，牧師の自己同一性における危機を招来していると語り，やがて80年代に話題になる牧師のいわゆる「アウト」症候群の問題を先取りしていたのである[5]。

ニーバーは，70年以降には，新しい牧師像として，「ディレクターとしての牧師」「群れの方向性を示し，信徒たちの働きの動機づけをし，指導していく者としての牧師」が考えられたと指摘したが，その流れは，現在では，み言葉によるコーディネーター（信徒たちの働きを統合・総合する者としての牧師の働き）としての牧師の働きの強調に受け継がれていると言えよう。

このような流れに対して，オーツは60年代の時点で，牧師の種々の仕事は管理的なリーダーシップよりむしろ，教師（教育者）としての役割を中心に最もよく統合され，自己認識されると主張した。2000年代に入り，W.ウィリモンは，牧師の公的礼拝における祭司の働きを重要視していると言えようか[6]。あるい

2　The Purpose of the Church and Its Ministry. Harper & Row, 1977. W. E. Oates, The Christian Pastor. Westminster Press, 1964 近藤裕訳『現代牧師論』ヨルダン社 1968 年に引用されている。

3　W.E.オーツ　前掲書 129 頁～139 頁。

4　「伝道」が挙げられていないのが興味深い。Richard Stoll Armstrong, The Pastor As Evangelist. The Westminster Press, 1984 参照。 アームストロングによると米国の牧師は，人がなかなか信仰をもってくれないゆえに達成感がわかず，「伝道」が好きではないと言う。W.ウィリモン『牧師　その神学と実践』（越川弘英訳）新教出版社，2007 年にも「伝道者」としての牧師の記述はない。

5　Gary L. Harbaugh, Pastor As Person. Augsburg Publishing House, 1984.参照。give out（へたばる），burn out（燃え尽きる），drop out（脱落する）という 3 つのアウト症候群。

6　W. Willimon, Pastor. The Theology and Practice of Ordained Ministry. Abingdon Press, 2002. 越川弘英訳『牧師　その神学と実践』新教出版社 2007 年。

は，宗教改革の伝統に根ざして，また，K.バルトに従いつつ，牧師の働きの中心をもう一度「み言葉の説教」に置くという考え方もあろう。バプテスト教会は，宗教改革，プロテスタントの一翼を担う教会として，神の言葉に根差した教会形成を目指し，牧師の働きもまた，み言葉の説教を中心に統合されるべきであろう。

しかし，牧師の働きの説教中心への回帰が，70年代，80年代の「ディレクターとしての牧師像」への反動として登場することは避けねばならないであろう。み言葉の説教が，どこか抽象的・普遍妥当的説教となり，「いま，ここで」の牧会や教会形成の言葉として語られず（共有されず），また，「ときのしるし」性を欠落させれば，それは，会衆にとって現実味を持たないものとなろう。いわゆる主題説教への反動としての講解説教では，神の啓示への応答責任性やキリスト教のアイデンティティは確立されるとはいえ，そこでキリスト者が生きる世界の出来事を「名づけること」に失敗するであろう[7]。それは，間違った説教ではないが，この世界に生きる聴衆にとって現実味の乏しい説教となろう。

また，牧師とその働きが，神と人に対する「僕」の姿勢でなされなければならないことは重要な視点である。しかし，それが，リーダーあるいはリーダーシップの単純な拒否として理解され，振る舞われるのもまた問題であろう。組織・管理の仕事を含めた牧師のマネージメント，リーダーとしての仕事が理解されず，それゆえに，信徒やスタッフの仕事を奪い，あたかも「便利屋」のように，何でも自分でやってしまう牧師（かつて「開拓伝道型」と呼ばれた），あるいは，本来牧師の仕事ではないような仕事で忙しくしている牧師もまた，その在り方を問われるであろう。牧師あるいは教会のリーダーたちは，「み言葉」を巡る職務を中心にして，そして「み言葉」による牧会者，教育者，ディレクター，コーディネーターとして「聖徒たちを奉仕のわざへと整える」（καταρτισμός καταρτίζω エペソ 4：12）働きへと召されているのではないだろうか。

エキュメニカルないわゆる「アクラ文書」は，代々の教会の文化と職務の機

7　David Buttrick, Homiletic. Moves and Structures. Fortress Press, 1987. 17-20.

構の多様性を認めながらも，「さまざまな職務の機構の中で，監督（司教，主教）と長老である牧師（司祭）と執事（助祭・輔祭）という三階層の職務が支配的である」と語り[8]，「リマ文書」も，新約聖書における職制の非固定性や多様性を認めつつ，「二世紀と三世紀に，監督（bishop 司教または主教），長老（presbyter 司祭），執事（deacon）助祭または輔祭」という三種の形態が，全教会に共通する職制として確立した」と断じている[9]。そして，「監督，長老，執事よりなる三種の職制の形態は，私たちが模索している一致の表現として，またこの一致にいたる手だてとして効果的に用いることができるであろう」とする[10]。

確かに，二世紀初期のイグナティオスの書簡は，当時の地域教会において，ある発展させられた階層性というものが存在していた証拠として見做されうるし，それらが「監督」（ἐπίσκοπος　パウロとは違い，ほとんど常に単数形で引用されている），そして「長老たち」の集団（πρεσβύτεροι 常に複数形），そして，「執事たち」（διάκονοι）であったことを示している。しかし，このような展開が，当時の「全教会に共通する職制」と見なすことが妥当性を持つのかどうか，そして，果たして「確立していた」と言うほど確立していたのかという疑問は残る。また，たとえそうであったとしても，パウロから牧会書簡そしてイグナティオスに至るこの展開は，イエスが宣教した福音やパウロの「霊の自由による共同体」理解からの適切な展開であったのかどうか，あるいは，それは，この世への適切な対応（帝国の迫害に抵抗するため）の産物であったのか，あるいは，逸脱であったのかどうかの評価が必要であろう。

バプテスト教会は，以上のようなエキュメニカルな流れと違って，二職制論，

8　日本キリスト教協議会信仰と職制委員会・日本カトリック教会エキュメニズム委員会編訳『洗礼・聖餐・職務　教会の見える一致をめざして』（日本基督教団出版局）1985年，160頁。

9　前掲書　86頁。新約聖書時代の教会の職務の非固定性については　E. Schweizer, Gemeinde und Gemeindeordnung im Neuen Testament. Zwingli Verlag, 1962. 佐竹明訳『新約聖書の教会像』新教出版社，1968年参照。また教会の職務については　Das Kirchliche Amt im Neuen Testament. Herausgegeben von Karl Kertelge,. Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1977，参照。

10 前掲書　88頁。バプテストは三職制論ではなく，牧師と執事という二職制論を採用している。

つまり，「牧師と執事」を教会の職制としてきた[11]。しかし，「牧師」という呼称は先に引用したエフェソ４：11に登場するだけである。すると，バプテストの場合，「牧師」という呼称に，新約聖書で証言された「監督」（エピスコポス）と「長老」（プレズビュテロス）を羊飼のイメージで統合して，その指導者像を描いていると言えようか。もしそうであれば，「監督」の職務の内容とはどのようなものであるのか，を考察したい。あるいは，階層性を暗示する「監督」やユダヤ教社会の「長老」のイメージをあえて排斥したと理解されるのか。もしそうであれば，用語だけでなく，「監督」や「長老」が有していた働きそのものも排除したのであろうか。このような問題意識をもって，そもそも新約聖書における「エピスコポス」とはいかなる内容を持った職務なのかを検討したい。この一考察においては，Andrew D. Clarke, A Pauline Theology of Church Leadership. T & T Clark, 2008を手掛かりとするが，H. W. Beyer のキッテルの新約聖書神学辞典の「エピスケプトーマイ，エピスコペオー，エピスコペー，エピスコポス」の項を参照する。

１．教会のリーダーシップ理解に対する新約聖書の共通の傾向

「エピスコポス」の語義の検証の前に，新約聖書に証言された，教会におけるリーダーシップ理解の共通傾向を確認しておこう。

1970年代以降，教会形成における「リーダーシップ」の重要性が叫ばれてきたことにすでに言及した。しかし，新約聖書一般そして特にパウロ書簡におい

11 「オランダのアムステルダムに居住するイギリス人の信仰宣言」（1611）では 20 条で聖書的用語を生かし，「それぞれの教会あるいは会衆の役員たちは，特に彼らの働きによってその群れの魂を養う長老たち，あるいは，彼らの働きによって貧しい者と身体的な不自由な者の必要を救援する男女の執事たちである」と告白し，牧師ではなく「長老たち」を用い，「スタンダード信仰告白」（1660）も 15 条で「神が彼の教会を監督し養うために任命した長老たちあるいは牧師たち」と言い，「執事たち」は 19 条で言及される。「第一ロンドン信仰告白」は 36 条で，「各教会は，キリストから彼らに与えられた力を持って，キリストが新約聖書において任命したように，み言によって…牧師たち，教師たち，長老たち，執事たちを選ぶ」と言い，「第二ロンドン信仰告白」（1977）は 26 章の 8 において「各個教会の役員は，監督たちあるいは長老たちと執事たち」であると告白している。W.L. Lumpkin, Baptist Confessions of Faith. Valley Forge/Judson Press, 1959.

ては，「指導者」（rulers, leaders）を表現する包括的な用語が，初期教会の働き人を表す用語としては，積極的に採用されなかったことを押さえておく必要がある。パウロは直接イエスとの面識はなかったが，イエスの神の国の宣教がパウロに影響を与えたであろうことは容易に推測できる。指導者あるいは支配者に関するイエスの言葉としてすぐに思い起こすのはマルコ10：42～45である。

そこで，イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように，異邦人の間では，支配者（ὁι ἄρχων）と見なされている人々が民を支配し，偉い人たち（ὁι μεγάλοι）が権力を振るっている。しかし，あなたがたの間では，そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は，皆に仕える者になり，いちばん上になりたい者は，すべての人の僕になりなさい。人の子は仕えられるためではなく仕えるために，また，多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。（新共同訳　ギリシヤ語は松見による挿入）

真の偉大さについての教えは，たぶん，イエスによって，一度だけではなく，たびたび言及されたのであろうが[12]，このパラグラフは，同じような形で，ルカによる福音書22：24～7 において，受難の物語の中で取り上げられている。（マルコの場合は受難週の文脈ではないが，三度目の受難の予告の後に位置づけられている）ルカでは，マルコ10：45節は欠落しており，「人の子」と「身代金」への言及はない。この最後の部分，「また，多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである」はイエス自身に遡ることはできない可能性が大きいが[13]，それ以外はイエスの宣教の中核の一つを形成する主張である

12　Vincent Taylor, The Gospel According to St. Mark. Macmillan, 1966, 443. 「いちばん先になりたい者は，すべての人の後になり，すべての人に仕える者になりなさい」は 9:35 にも登場する。

13　E.シュヴァイツァー『マルコによる福音書』高橋三郎訳，NTD 聖書注解刊行会　昭和 51 年によれば，文脈に合わないので，この部分そのものがマルコの編集である。弟子たちは来るべき栄光における序列ではなく，教会の中で誰が偉いかを考えていたからであると言う。この二つの局面をそれほど明確に区別できないと思うが，犠牲の血についてはマルコ 14：24 に仄めかされてはいるが，イエスの死との関連で「身代金」（λύτπον）が用いられているのは新約聖書ではここだけである。（マタイの並行記事 20：28は別として）

と見てよいであろう。ここでは，異邦人の「支配者」(指導者 leaders よりは rulers であろうが)，「偉い人たち」に対しては否定的に語られている[14]。三度「あなたがたの間では」(ἐν ὑμῖν) が繰り返され，「異邦人の」(τῶν ἐθνῶν) あり方と鋭く対比されている[15]。この決定的違いこそがイエスを十字架へと導いたのであろう。

この用例で明らかなように，指導者・支配者に関する一般的用語のいくつかは，当時のヘレニズム・ギリシヤ社会においては良く用いられており，かなり広い領域にまたがっていた。一般的用語は，ἄρχων, ἡγεμών, στρατηγός, そして，προστάτηςであり，それらの合成語も含まれていた。ἄρχωνは新約聖書では37回の用例がある[16]。 ἡγεμώνは「ヘゲモニー」(覇権) の語源となった言葉であるが，ユダヤにおけるローマ総督の職務がこの称号で呼ばれていた[17]。(マタイ27：2，11，ルカ20：20，使徒23：24など) また，マルコ13：9 (マタイ10：18，ルカ21：12) は「ローマ総督」というより，一般的な「総督」を意味しており，Ⅰペトロ2：14の服従勧告も「権威を付与された存在」として属州に派遣された「総督」を意味している。 στρατηγόςは，元々，軍事的指導者を意味するが (στρατέυομαι＝ 戦争に行く，戦いを挑む)，この複数形は使徒言行録16：20，22，35，36，38で植民都市フィリピの「高官たち」を指し，4：1，5，24では「神殿守衛長」と翻訳されている[18]。以上の用例から明確なように，これらの称号は，軍事的，市民的，帝国的，あるいは，祭司的文脈で用いられ，軍事的，政治的，祭司的公職を指す特別のタイトルであった。προστάτηςは「パトロン」を意味するが，ローマ16：2においてフェベが「援助者」と呼ばれている。

さらに，ヘブライ語聖書のギリシヤ語訳においては，指導者を示す，二つの

14　教会における指導性を考える上でのこのイエスの説話の重要性については，David Stark, Christ-based Leadership, Bethany House, 2005, 16 参照。

15　Rudolf Pesch, Das Markus-Evangelium. 2.Tail, Herder, 1977, 161.

16　『ギリシヤ語新約聖書釈義事典Ⅰ』(荒井献監修) 教文館，1993 年，205 頁。

17　『ギリシヤ語新約聖書釈義事典Ⅱ』151 頁参照。

18　『ギリシヤ語新約聖書釈義事典Ⅲ』320 頁。

この特殊な用語，つまり，ἄρχων と ἡγούμενοςが良く知られている[19]。そして，これらの用語はある特定の文書にのみ生じるというより，ギリシヤ語訳全体に見出される[20]。

これらの両方の言葉は，新約聖書にも生じるが，それらは新約聖書に万遍なく広がっていないだけではなく，それほど頻繁に用いられてもいないことが特徴として指摘できる[21]。さらに，それらが生じるところでは，それらは大部分，ユダヤ教のシナゴーグあるいはユダヤ国家，当時の帝国支配者たち，あるいは悪霊的諸力への言及の文脈においてである[22]。キリストがὁ ἄρχων と呼ばれているのは，唯一，ヨハネ黙示録１：５においてのみである。「地上の王たちの支配者」（ὁ ἄρχων τῶν βασιλέων τῆς γῆς）。それゆえ，A.D.クラークは，「『指導者』という一般的呼称は，ほとんどの場合，初期キリスト教共同体に関連して用いられていないか，あるいはその本質は明確に再定義され，あるいは意味が

19　70 人訳において，名詞のἄρχωνは 624 回生じ，ある立場における指導的公職に言及する接頭辞ἀρχι-を伴う合成語（つまり，ἀρχιστράτηγος, ἀρχιερεύς, ἀρχηγοης）は 167 回生じる。現在分詞　ἡγούμενοςは 129 回用いられている。そして名詞　ἡγεμώνは 84 回生じる。しばしば用いられる箇所として，οἱ ἄρχοντες τῆς σύαγωγῆς（出 16・22，34・31，民数 31・13，ヨシュア 9・15，22・30）；οἱ ἄρχοντες [Ισραηλ]（民数記 1・44，4:34, 46, 7:2, 歴代下 12:6）;ὁ ἄρχων τῶν υἱῶν[Ιουδα]（民数2passim）; οἱ ἄρχοντες πατριῶν（ヨシュア 14・1，歴代上 7・40，8・6，10，28，9：9，15・12，26・21，32，エズラ 8・1，10・16，ネヘミア 11・13，12・22）；ἄρχοντες οἴκων（民数 7・2，ヨシュア 22・14，歴代上 7・2，9，9・13）；ἄρχοντες τῆς δυνάμεως（列王下 9・5，25・23，26・1，歴代上 25・127・4，士師 14・19，Ｉマカベヤ 5・56）そしてἄρχοντες του λαοῦ（士師 10・18，ネヘミア 10・15，11・1，詩篇 46・10，イザヤ 28・14）などがある。

20　これらの 2 つの用語は，ルツ記，トビト書，4 マカベヤ書，雅歌，ヨエル書，オバデヤ書，ヨナ書，ハガイ書を除き，あらゆる文書に用いられている。注 19 を含め，Andrew D. Clarke, A Pauline Theology of Church Leadership. 1-2 より引用している。

21　新約聖書におけるἄρχωνとἡγούμενοςの頻度は（千語につき何回用いられるかで計量されて）70 訳におけるより 4 分の 1 以下である。Andrew D. Clarke, op. cit., 2.

22　パウロはローマ 13・3 で帝国の諸権威についてἄρχωνを用いる。そしてＩコリ 2・6-8 とエフェソ 2·2 で霊的諸力について用いている。動詞ἄρχω「私は支配する」はローマ 15・12 においてパウロによって用いられ，そこで彼はイザヤ 11・10 を引用し，異邦人を支配するであろうエッサイの根に言及している。さらに，この語はしばしばユダヤ教の国家的そして会堂支配者に言及するため福音書と使徒言行録で用いられている。ἡγούμενοςという言葉は，指導者たちとの関連でパウロの文書には見出されない。しかし，ヘブライ書の著者はこれを地方教会の指導者たちについて用いている（13・7，17・24）。A．D. Clarke, op. cit., 2.

緩和されている」[23]と結論するのである。

クラークによれば，当時のリーダーシップに関する用語のこの外見的な拒否あるいは躊躇は，神学的にいくつもの重要な問いを引き起こす。特に，パウロ神学において，「リーダーシップ」を強調することそのものが妥当性を持つのかどうかという基本的な問いが生じる。このような用語上のパウロによる回避は，初期教会が主に，「平等主義的」（egalitarian）共同体であったので，あえて，リーダーシップに関する同時代の，包括的タイトルを使用しなかったと見做すべきであろうか。パウロは，キリスト教会内で，「使徒たち」以外の指導者たちを意識的，原理的に任命することを拒否したのだろうか。最初期キリスト教共同体の広がりの中で，各個の教会に指導者たちがそもそも存在していたのだろうか。各個教会には社会的影響のある人物が存在していたにもかかわらず，パウロはあえて，「平等主義的」あり方を好んだのだろうか。

また，もし彼が地方の各個教会のリーダーたちの存在を認めていたと仮定する場合は，彼は，当時の広く用いられていた語彙と明確に区別された別の用語，タイトル，あるいは特質を導入しているのだろうか？もしそうであれば，それらの特質と語彙は何であったのか，そして，いかにそれらは当時の世界の実践と違っていたのだろうか。

このような歴史的，神学的な問いがあるにもかかわらず，教会は教会における指導的職務の担い手を考えるとき，単純に，新約聖書において言及されているからという理由で，「監督」，「長老」，「執事」を自明的に用いて来なかったであろうか。新約聖書証言におけるそれらの呼称が意味していた内容と教会史的発展の文脈におけるそれらの呼称の意味は異なっていないのだろうか。

こうして，「支配する者，偉い者ではなく，仕える者，僕として生きよ」とのイエスの言明の影響下，当時良く知られた指導者，支配者を表現する用語が，教会内では避けられているという共通の傾向が認められる。

23　このことの唯一の例外は，προΐστημιであり，それはパウロによっていくつかの場面で採用されており（ローマ12・8，Ⅰテサロニケ5・12，Ⅰテモテ3・4，5，5・17，テトス3・8，14），そして関連名詞προστάτηςはローマ16・2でその女性形で用いられている。しかし，ほとんどの部分で，これらは家を管理する文脈か，あるいはRSVで「支配」よりむしろ「支援」あるいは「助け」の意味で翻訳されるかである。

2．最初期教会の指導者たちの「タイトル」について

新約聖書の教会についての多くの研究が，監督，長老，そして執事という特別なタイトルを教会理解の基礎をなすものとしてなされてきた。しかし，A.D.クラークによれば，これらのタイトルだけに依存して，そのタイトルの存在や不在によって最初期の教会のあり方を復元することは「不備なアプローチ」である。そもそも，これらの用語が教会の個々の「働き」を指しているのか，あるいはある確立された公的職務を「担う者」を意味しているのかも定かではない[24]。例えば，通常「監督」と翻訳されてきた「エピスコポス」はまさに，「全体を見渡すという働き」の担い手なのか，あるいは「監督」という職制を意味するのかは新約聖書時代においては，曖昧であるからである。クラークは，指導者たちのタイトルの存在あるいは不在を強調して構築された最初期教会像は六つの点で不備であると主張する。

1）そのようなアプローチは，パウロ書簡が公的職務のタイトルに言及していないような信仰共同体にどのような指導者たちが存在していたのか，そのような指導者たちがどのような影響を与えたのかあるいはどのようなタイプの指導者であったかを明確にすることに失敗しがちである。

2）このアプローチは「監督」，「長老」，そして「執事」の三つのタイトルに不当な重要性を与え，パウロ文書の別の個所で用いられている他の用語を無視する傾向にある。

3）これらのタイトルは，それらの文字通りのコンテクストにおいてさえ，それらの地位の現実的な働きがどのようなものであったかをほんの少ししか私たちに語ってくれない。結果的に，この働きの内容はしばしば別の個所から補充され，そしてその後，それらのタイトルが用いられている教会にのみ当て嵌められ，そして，その教会にそのような担い手が常に存在し

24　例えば，Ⅰコリント 12：28 後半を新共同訳は「次に奇跡を行う者，その次に病気をいやす賜物を持つ者，援助する者，管理する者，異言を語る者などです」と翻訳するが，岩波訳では，「次に力ある業，次に癒しの賜物，補助の働き，指導能力，そして種々の異言を置かれたのである」と翻訳している。(534 頁)

ていたかのように仮定されてしまう。

4）このアプローチは，これらのタイトルがほんの稀にしか用いられていないこと，そして，しかし，より後代の手紙に限定されているわけではないことを十分に評価せずに，あたかも直線的に教会の職制が発展したかのような解釈モデルと結合されて用いられる。

5）その関心が個別教会の統治と秩序に興味を持っている個々人に宛てられた手紙と，より大きな諸信仰共同体に対して書かれた手紙との間の区別が不十分である。より大きな諸信仰共同体に対して手紙を書く場合には，わざわざタイトルに言及したり，その資格に言及する必要性がなかったのかも知れない。だから，そのタイトルの不在が，実際にそのような担い手が不在であったことを必ずしも意味しないかもしれないのである。

6）リーダーシップ構造の分析が，しばしば，会衆のサイズ，構造，歴史的コンテクストを考慮することなしに独立的に追求される危険がある。

以上のように，「監督」，「長老」そして「執事」という言葉を当時の教会の事情や社会的コンテクスト抜きで理解し，それを手掛かりにして最初期の教会のあり様を推論することは，当時の教会を歪めて理解することに繋がることを覚えつつ[25]，クラークは，上記の三つの呼称を当時の「家の教会」の文脈で解釈し，それだけではなく，次に，当時の教会の指導者たちの地位（status），指導者たちの権力（power），指導者たちの課題（task），そして指導者たちの用いたもの（tools）についても「家の教会」を念頭にして論じている。タイトルだけで当時の教会像を論じることを批判するクラークの意図に反して，この小論で，指導者たちのタイトルの一つである「エピスコポス」から見えてくるもの

25　佐竹明『ピリピ人への手紙』現代新約注解全書　新教出版社，1969 年 14 頁。「牧会書簡では，同じ職名があげられ，しかもそこにはより詳しい叙述がなされているので，彼らの職務についてある程度具体的な推定を下すことができる。しかし，それを直ちに，パウロが書いた当時のピリピ教会にあてはめることができるかどうかは，これまた非常に疑問である。すでに，われわれの箇所（ピリピ 1：1）では，牧会書簡，あるいは二世紀初頭のイグナティオスの手紙の場合とちがい，監督が複数形ででていることは，あまりに安易に，後代の監督，執事をもとにして，この箇所のそれらを理解することを慎まなければならないことを示している」。

を論じることは矛盾ではあるが，このタイトルが当時の「家の教会」でどのような働きをその内容として持っていたかを研究することによって，クラークの著書の全体像も見えてくるので，この小研究にもそれなりの意味はあるであろう。

2-1 「監督」以外のリーダーたちのタイトルについて

「監督」の語義と新約聖書における「監督」の働きのより広い文脈を考慮するために，「監督」の呼称以外の呼称について目を向けておこう。

第１世紀のグレコ・ローマン世界は，名誉や公職という社会的地位を「称号」を用いて表現する文化であったと言えよう。それらの称号は，単にローマ市民的・帝国的な政治的コンテクストにおいてだけではなく，宗教的，祭司的コンテクストにおいても存在していた。ローマ皇帝が皇帝礼拝の対象であったことはその好例であろう。そして，皇帝以外でも，影響力のある人々は，公職の宗教的また政治的タイトルの両方を保持していたと考えられる。

エルサレムの原始キリスト教会やパウロ的信仰共同体は，そのような文化的土壌の中に成立したが，パウロはイエスの福音理解に従い，当時のグレコ・ローマン世界の秩序や権力構造に挑戦しながら，教会のあり方を構想していると言って良い。

パウロがある特定の個々人を表すために用いた言葉は，縦方向へのヒエラルキーを示すよりも，水平の兄弟・姉妹関係を表現する「同労者・協力者」（συνεργός）という用語であった。この用語は，二次的パウロ文書であるコロサイ書を含めて，12回登場する。（ローマ16：3，9，21，Ⅰコリント３：9，Ⅱコリント１：24，８：23，フィリピ２：25，４：3，コロサイ４：11，Ⅰテサロニケ３：2，ピレモン１，24）この用語は，教会内部におけるいかなる格付けも反映してはいない。むしろ，コリントの手紙の用例が示すように，そのような格付けに反対してこの言葉が用いられている。

> アポロとは何者か。また，パウロとは何者か。この二人は，あなたがたを信仰に導くためにそれぞれ主がお与えになった分に応じて仕え

た者です。わたしは植え，アポロは水を注いだ。しかし，成長させてくださったのは神です。ですから，大切なのは，植える者でも水を注ぐ者でもなく，成長させてくださる神です。植える者と水を注ぐ者とは一つですが，それぞれが働きに応じて自分の報酬を受け取ることになります。わたしたちは神のために力を合わせて働く者（συνεργοί）であり，あなたがたは神の畑，神の建物なのです。（Ⅰコリント3：5-9　新共同訳　ギリシヤ語は松見の挿入）

パウロは，同僚の指導者アポロやテトス（Ⅱコリント8：23），エパフロディト（フィリピ2：25），テモテ（Ⅰテサロニケ3：2）に対してだけでなく，コリントの信徒たち全員を「同労者」とみなしており，ローマ教会にもパウロの「協力者たち」がいた。

次に良く知られた働きの担い手は，「預言者」（ὁι προφῆται，ὁ προφητεύων）であり，新約聖書には8回用いられ，特に，Ⅰコリント12章と14章に集中している。これは旧約聖書の預言者というより，初期教会のコンテクストにおいて，霊の自由に導かれて預言活動をした者たちを意味しているが，異言を語る熱狂主義的な者とは区別されている。

「教師」（διδάσκαλος）のタイトルは4回用いられ（Ⅰコリント12：28，29），牧会書簡では，パウロ自身が「宣教者，使徒，教師」と呼ばれている。（Ⅰテモテ2：7，Ⅱテモテ1：11）

「奉仕者」（διάκονος）は，一般的に教会に奉仕するという関連で7回登場し，これらの内の4回だけが任命された職務である「執事」を意味している。（ローマ16：1，フィリピ1：1，Ⅰテモテ3：8，12）教会の「職務・職制」（Amt, ministry）と翻訳される言葉は，まさに，διακονίαである。先に引用したイエスの言葉「あなたがたの中で偉くなりたい者は，皆に仕える者（διάκονος）になり，いちばん上になりたい者は，すべての人の僕（δοῦλος）になりなさい」がパウロの教会にも生きているのである。E.ケーゼマンは，パウロの信仰共同体は，キリストの体である教会に働く霊とカリスマによる共同体であり，それらが熱狂主義には結び付かず，「奉仕」（διακονία）と結びついていると主張して

いる。「こうして，Ⅰコリント12, 4ff.において，διακονίαιはカリスマタと交換可能であり，そしてついに，ローマ11, 29においては，Ⅰコリント７, 7.17ff.におけるように，カリスマタと神の召しは結合され，交換可能なのである」[26]。さらに，また，「彼（パウロ）にとって真正のカリスマの実証は，何か超自然的なことが生じるという事実の中にではなく，カリスマのふさわしい使用のあり方（Modalitaet des angemessenen Gebrauches）にある。いかなる霊的資質もそれ自身で価値や権利やあるいは特権を持つのではない。それは，それがなす奉仕（Dienst）によってのみ妥当性を与えられる[27]」と主張する。パウロの教会を一言で表現すれば，教会はキリストの体であり，教会は福音宣教に奉仕することに結びついたカリスマ共同体である[28]。

さらに，登場頻度の多い用語は「使徒」（ὁ ἀπόστολος）で，パウロが自らを呼称する場合を除き，16回用いている。パウロは教会の柱である使徒の存在を認めてはいる。「神は，教会の中にいろいろな人をお立てになった。第一に使徒，第二に預言者，第三に教師」（Ⅰコリント12：28）。しかし，パウロにとって「使徒」は，ルカ文書の基本定義のように生前のイエスと共にいて，復活の証人となった者でも，教会の権威としての称号でもなく，語義が本来示すように，福音宣教のために派遣された者なのである。「わたしたちは（パウロ，シルワノ，テモテ）は，キリストの使徒としての権威を主張することができたのです」（Ⅰテサロニケ２：７）。「わたしの同胞で，一緒に捕らわれの身となったことのある，アンドロニコとユニアスによろしく。この二人は使徒たちの中で目立っており，わたしより前にキリストを信じる者になりました」（ローマ16：７）。ここに教会の権威構造以上に，霊の自由と福音宣教の使命，奉仕を重視

26　E. Kaesemann, “Amt und Gemeinde im Neuen Testament,” in: Exegetische Versuche und Besinnungen. Vandenhoeck & Ruprecht, 1970, 111.

27　Op. cit., 112.

28　新約聖書時代の教会にはいかなる固定化する職制が存在しなかったことについては，E. Schweizer, Gemeinde und Gemeindeordnung im Neuen Testament. Zwingli Verlag, 1962.佐竹明訳『新約聖書における教会像』（新教出版社）1968 年。ディアコニアについては，Diakonie-biblische Grundlagen und Orientierungen: ein Arbeitsbuch zur theologischen Verständigung über den diakonischen Auftag / herausgegeben von Gerhard K Schäfer und Theodor Strohm, HVA, 1988 参照。

したパウロの信仰の特徴がある。

以上のような短い考察からも明らかなように，たとえ後代の教会史の発展を是認するとしても，新約聖書におけるパウロの教会内のタイトルに，「手紙内のそれらの使用が暗示しうる以上のより大きな重要性を与えることは避けるべき」[29]なのである。

こうして，新約聖書におけるリーダーシップを示すタイトルは，上下関係ではなく，水平の兄弟姉妹関係で教会秩序を考えているのである。

2-2　監督・全体を見張る者（ὁ ἐπίσκοπος）

では，いよいよ，「エピスコポス」の吟味に入ろう。新約聖書における「長老」と「執事」の称号については最近の研究の主題として取り扱われてきたが，「監督」についてはあまり注目されて来なかった。

「全体を見渡す者」（overseer）あるいは「監督」（bishop）と翻訳される「エピスコポス」という用語は，新約聖書において 5 回用いられており，パウロ文書では，フィリピ 1：1 に一度複数形で登場するだけである。牧会書簡では，Ⅰテモテ 3：2 とテトス 1：7 に用いられている。そして，これに関連した ἐπισκοπήは，Ⅰテモテ 3：1 に登場する[30]。あと一つは，使徒言行録20：28であり，もう一つは，イエス・キリストご自身の称号である（Ⅰペトロ 2：25）。

このように「エピスコポス」がパウロ書簡において 1 回しか用いられていないゆえに，フィリピ 1：1 の「監督たちと執事たち」への言及（複数形で，無冠詞）は，解釈上多くの論議を産んできた。これらの見張る者たちと執事たちは，フィリピの聖徒たちの共同体（「フィリピにいて，キリスト・イエスに結ばれているすべての聖なる者たち」）の中のあるサブグループとして（「すべての聖なる者たち」とσύνで結ばれている）理解され，大切な部分としてみなされていることは否定できないだろう。とは言え，冠詞は付加されていないし，

29　A. D. Clarke, A Pauline Theology of Church Leadership. 47.

30　『ギリシヤ語新約釈義事典Ⅱ』64 によると，新約聖書におけるエピスコペーの使用は 4 例で，そのうち 2 回はルカ文書であり，Ⅰテモテ 3：1 以外ではⅠペトロ 2：12 である。また「異読」として 5：6 が挙げられている。

パウロによるそれらの呼称の内容説明は全くない。それゆえ，「監督たち」あるいは「全体を見渡す者たち」が，地方教会の監督権を持っている人たちを意味するのか，あるいは，それほど特別ではない，一般的な意味で用いられているのかがこのテキストからははっきりしないのである[31]。以上のような事実から，つまり，用例が新約聖書には５つしかなく，その職務の明確な規定もないため，まず，「エピスコポス」の動詞形について考察し，しかも，新約聖書における用例だけではなく，聖書以外の世俗的ギリシヤ語の意味，そして，ヘブライ語聖書のギリシヤ語訳の用例も調べ，それらと対比しながら，新約聖書のἐπισκοπέωの意味を吟味する必要がある。その後，同じような手順で新約聖書における「エピスコポス」の意味を探ることにする。

2-2-1　新約聖書外のἐπισκέπτομαι, ἐπισκοπέω

H. W. Beyer は，エピスコポスの理解を論じるに際し，その動詞であるἐπισκέπτομαι, ἐπισκοπέωの意味の吟味から始める。

彼は世俗的ギリシヤ語におけるこれら動詞の意味を３つ挙げている。第一は，「誰か，何かを見ること」「何かを見渡すこと」（etwas ueberschauen），「見物・視察すること」（besichtigen），「観察すること」という意味である。また，「視察する」ということで，王の行為をも意味しうる[32]。ある学識ある「監督」が街を見張っていれば, 国は良き秩序を維持するという用例もある（Plat, Resp VI, 506b）。犬儒派の用例では，手紙の最後に「自分自身にお気を付け下さい」というものもある。また，宗教的な用例として，神々の活動として，恵みを持っ

31　Von Campenhausen, Hans F., Kirchliches Amt und geistliche Vollmacht. Tuebingen/J. C. B. Mohr, 1963, 74 は，「人はこれらの特徴ある配列（Zusammenstellung）に，より後代の一般的語法を考慮して単なる不確定な「職務描写」をかろうじて見得るだけだというのではなく，たとえそれらが非常に一般的でかつ中立的で全く世俗的な（unsakraler）起源と性質を持つものであったとしても，固定化された職務名称，いわゆる称号が問題なのである」と言う。また，カンペンハウゼンは，パウロの教会が「霊的カリスマの共同体」であるからして，ユダヤ教的由来の「長老」（Aelteste）という称号を用いることはないので，監督と長老を同一視することに疑問を投げかけている。（86）佐竹明『ピリピ人への手紙』14 頁。

32　ThWNT Ⅱ, 596.

て世界を見渡す，あるいは世話をする，見張るというものもある。また，エピスコペオーの反復する特色に対応して，人々や物事を支配あるいは見張るという神々の働きは，何か一つの具体的な活動ではなく，神々に相応しいある「態度と気質」(Haltung und Gessinung) を意味している。第二に，この動詞は，「何かを反省熟慮すること」(nachdenken)，「何かを吟味すること」「査問すること」を意味する。つまり，その行動が何か決定的に必要とされているときに用いられる。第三に，この動詞は「訪問すること」(besuchen) を意味し，特に，病人を訪問する時に用いられる。

2-2-2　七十人訳におけるἐπισκέπτομαι, ἐπισκοπέω

バイアーは次に，七十人訳を検討する。彼は，ヘブライ語聖書のギリシヤ語訳は，この言葉に新しい意味を付け加えたという。つまり，神々が世界を見下ろすという僅かな用例を取り上げ，ある深い宗教的意味を持つようになったというのである。この用語は一般的にヘブライ語のファーカド（出かけていくこと，訪問すること）の訳語として，また，時にバーカル（骨をおって進むこと，尋ねること）の訳語にも用いられた。そして世俗的ギリシヤ語の第三番目の用例のように，「訪問すること」(士師15：1）はじめ，「観察すること」(詩編26：2，列王下 9：34)，そして，「探すこと」を意味し，更に深められ，「何かに関心を持つ，世話する」となり，ここで，七十人訳は，この動詞を羊飼と羊の世話の意味で用いている。「あなたたちは，わたしの羊の群れを散らし，追い払うばかりで，顧みることをしなかった」。(エレミヤ23：2)。「見よ，わたしはこの地に羊飼いを起こす。彼は見失ったものを尋ねず…」(ゼカリヤ11：16) と言われ，偽りの羊飼いを糾弾しているが，エゼキエル34：11～12では積極的に神ご自身を指し，「まことに，主なる神はこう言われる。見よ，わたしは自ら自分の群れを探し出し，彼らの世話をする。牧者が，自分の羊がちりじりになっているときに，その群れを探すように，わたしは自分の羊を探す」と言う[33]。歴代誌下34：12では，エピスコペオーがエピスポイの仕事を意味して「監

33　だたし，ゼカリヤの当該箇所については ℵ * vid において，ζητήδῃに代わってἐπικέψηταιが用いられ，エゼキエルではただAのみ。ThWNT Ⅱ, 597.

督として任命された」とある。「探す」という意味との関連で，この語は「何かを見つけ出すこと」を意味する。「兄さんの安否を確かめ，そのしるしをもらって来なさい」。（Aのみ）

さらに，七十人訳では，この用語はしばしば，「調査する」（mustern）を意味する。主はモーセに「人口を調査すること」を命じられたが（出30：12），この意味でこの動詞は民数記に43回も登場する[34]。このような用法と関連して，最後に，この動詞は，失われた者を発見するという考えと繋がり，「失う」，あるいは受動態で「失われていること」を意味することもでき，サムエル上20：6では，ダビデのヨナタンへの問いかけとして「そのとき，お父上がわたしの不在に気づかれたなら」（ἐὰν ἐπισκεπτόμενος ἐπισκέψηταί με ὁ πατήρ σου）と語っている。バイアーはこのような事例として，サムエル上20：18，25，27（「空席」），サムエル下2：30（アサエルが欠けていた），列王下10：19（「欠席」），エレミヤ3：16などを挙げている。これらはファーカドのニファール形の翻訳である。バイアーは「ἐπισκέπτομαιという用語が七十人訳においてある宗教的な意味を持つのは，神がその行動の主語であるときのみである」と述べ，また，一つの事例で，「エピスコペインは，神々の保護下の領地のために神々がなす恵み深いケアの意味で同じように用いられていると言う。申命記11：12において，カナンの土地は，「あなたの神，主が恵みにおいて目をかけておられる」地として記述されている。（ἢν Κύριος ὁ Θεός σου ἐπισκοοεῖται）ここでἐπισκοπέωはダラシュ（探し求める）の翻訳である。それは神の側での不変の態度を指しており，ἐπισκέπτομαι はこの態度の現実化なのである。これは，「ルターが『訪問する』（heimsuchen）という語で翻訳したほとんどの場所で用いられ，主なる神がイスラエルの民に特別の介入するときに用いられ，神の意志を怒りあるいは恵みにおいて宣言している。このような意味は世俗のギリシヤ語では生じておらず，旧約聖書の救済史の文脈にのみ見出され，そこから新約聖書に繋がるのである。この訪問は，神が，その罪と困窮において彼の民を近くに引き寄せ，彼自身を歴史の主として示すのである」[35]。こうして，神の「訪

34　Ibid.
35　Ibid.

問」（heimsuhung）は，神の審判と恵みの両方を意味することとなり，ἐπισκέπτομαιは「罰すること」「審きの座に座ること」を意味するようになる。また，おなじ「訪問」の謂から，「ある人あるいは人々を，恵みをもって受け入れること」も意味する。創世記21：1は「主は，約束されたようにサラを顧み」と語る。

最後に，ἐπισκέπτομαιは「誰かを任命し，委託し，就任させること」を意味する。ゲルショムの子らはアロンの指示によって，「すべての運搬の任務を与え」られ（民数記 4：2732），ネヘミヤはレビ人を門衛と詠唱者の「任務に就けた」（ネヘミヤ 7：1）。重要な箇所は民数記27：16～17である。「主よ，すべての肉なるものに霊を与えられる神よ，どうかこの共同体を指揮する人を任命し，彼らを率いて出陣し，彼らを率いて凱旋し，進ませ，また連れ戻す者として，主の共同体を飼う者のいない羊の群れのようにしないでください」。バイアーは以下のように言う。「これらの言葉は，初代キリスト教会に指導者たちを就任させることに一役買ったかもしれず，たぶん，その会衆指導者たちのためにἐπίσκοποςという称号を選ぶに影響を及ぼしたかもしれない」。一つの重要な示唆である。

バイアーは，神々が世界を見下ろすという用例を指摘しながら，七十人訳以外では，ἐπισκέπτομαιは，いななる宗教的重要性を持たないという。ギリシヤの神々の「見張ること」はたぶん，王や政治家，官僚たちの「見張ること」に近いのかも知れない。彼はフィロンもヨセフスもこの言葉をただ世俗的な意味にしか用いていないと指摘する。また，ラビたちも神的訪問の考え方の発展に何も付け加えなかったと言うが，「他方，訪問，特に，病人の訪問はラビの倫理においては重要である」[36]と言う指摘は，キリスト教会にとってのこの言葉の理解には重要である。ある一人のラビによれば，「それは愛の働きの一つであり，あらゆるユダヤ人がなすべき宗教的義務である。病人の訪問と並び，見知らぬ者の保護，新しく結婚した貧しい者たちの支援，悲しむ者を慰めること，そして儀式的義務（葬儀？）への参加は価値がある」（Schab 127a）。この用例

36　Op. cit., 599.

も心に刻んでおく価値のあるものである。

2-2-3　新約聖書におけるエピスケプトマイとエピスコペオー

では，次に，新約聖書におけるエピスケプトマイとエピスコペオーの用例を検討しよう。バイアーは「イエスは疑いようもなく，ラビ的倫理における病人の訪問に関する高い評価を知っていた」と主張する。有名なマタイ25章の最後の審判の言及における，「わたしが飢えていたときに食べさせ，のどが渇いていたときに飲ませ，旅をしていたときに飲ませ，裸のときに着せ，病気のときに見舞い（ἐπεσκέψασθέ με），牢にいたときに訪ねてくれたからだ」（35～36）にはそのような響きが伝わってくる。イエスはこのようなラビ倫理を対内倫理に留まらず，あらゆる人間の愛の働きに高めたのである。イエスは２つの点でその意味を深めた。それは根本的な人間の態度の問いであって，個々の行為の問題ではない。人は自分自身のために存在するのではなく，他者と共に，他者のために存在するのである。そして，そのことは人の行動の中で表現されねばならないのである。さらに，イエスは，神は他者と共に他者のために存在することの中にご自身を臨在させる（in solchem Miteinander- und Fuereinanderdasein Gott gegenwaertig ist）ということを主張したのである。ヤコブは「みなしごや，やもめが困っているときに世話をすること（ἐπισκέπτεσθαι），これこそ父である神の御前に清く汚れのない信心です」（1：27）という教えにおいてユダヤ教の良き伝統とイエスの教えを結合していると言えよう。

この言葉の第二の強調点は，単に誰かを訪問するというのではなく，訪問相手に深い関心を持ち，他者のための応答責任を果たそうとすることである。パウロはバルナバに「さあ，前に主の言葉を宣べ伝えたすべての町へもう一度行って兄弟たちを訪問し（ἐπισκεψώμεθα），どのようにしているかを見てこようではないか」と言って伝道旅行に出立した。（使徒言行録15：36）

エピスコペオーは，ヘブライ12：14にも登場する。ここでは，訪問するという意味ではなく，神の恵みから除かれることのないように，「気をつけなさい」（ἐπισκοποῦντες）と勧められている。バイアーによれば，この用例は，七十人訳で良い羊飼いの働きを記述したときに用いられたエピスケプトマイのよ

うな意味であり，「エピスコペインはここでまず，あらゆる会員の永遠の救いのための共同体の責任を指し示す態度を表していること，そして，後に，指導者の単一の特別な課題となったものが，第二に，こうして全会衆のための事柄として表現されていることに気づくことは価値あることである。全体としての会衆が互いにそのようなある本質的な監督的務めと職務のような担い手（als Traeger eines wesentlichen bischoeflichen Dienstes und Amtes）として理解されている。」[37]とバイアーは主張するが，ある教職主義批判としてはうなずけるが，これは少々読み込みすぎではないだろうか。

Ⅰペトロ5：2では，長老たちに対する勧めとして，「あなたがたに委ねられている，神の羊の群れを牧しなさい（ποιμάτε）。強制されてではなく，神に従い，自ら進んで世話をしなさい（ἐπισκοποῦντες）」と言われている。これは当然，2：25「あなたがたは羊のようにさまよっていましたが，今は，魂の牧者であり，監督者である方のところへ戻ってきたのです」という，キリストご自身が，牧者（ὁ ποιμένος）であり，監督者（ὁ επίσκοπος）[38]であるという信仰に根差している。キリストは信仰共同体の全体を見張りながら，それを養い，世話する責任を果たされたと見做され，その働きの類比として，教会の指導者の働きが展開されている。ここでもバイアーは「各個教会における長老たちの責任がこのように普遍的教会との関係におけるイエスの働きと比較されていることは，それが初期キリスト教によって理解されたように，この職務の尊厳（die ganze Hohheit）をわれわれに知覚させる。」と言うが，これも初期教会からの単純な直線的発展としての単一司教制の正当化を意味するなら，読み込みすぎであろう。

新約聖書のエピスコペオーの第三の意味は，「誰かを職務に任命すること」である。使徒言行録の6章で使徒たちがいわゆるヘレニストのリーダーを任命する場面で，「それで，兄弟たち，あなたがたの中から，霊と知恵に満ちた評

37　Ibid, 600.

38　ここでは冠詞がなく，監督するものである牧者という翻訳も可能であり，5：2 に ἐπισκοποῦντεςが付加された根拠になっているのかも知れない。エフェソ4：15でも牧師と教師がそれぞれの職務の担い手ではなく，同じように「牧者・教師」と理解できる。

判の良い人を七人選びなさい。彼らにその働きを任せよう（ἐπισκέψασθε aor.1. imper. 2pers. pl.）と語られている。バイアーはこの出来事に対して興味深いことを指摘している。ここでも霊と知恵に満ちたとは言われていたとしても，「使徒言行録 6 に記述されたこの出来事は，地上を歩む，あるいは復活した主の召命を通してでもなく，あるキリスト者におけるカリスマ的な霊の自己証明を通してでもなく，会衆の選挙によって，教会の職務が委託される最初の事例であるゆえに，キリスト教の組織の歴史における決定的な重要性を持つのである[39]。」ここに，初期教会のカリスマ的霊の共同体から，ルカ時代の過去に遡って回顧された教会像との間に一つの溝があることは明らかである[40]。

エピスコペオーの第四の意味は，「神の訪問」（Heimsuchen）の概念であり，特に，人々と国々への神の恵み深い訪問の概念は，ヘブライ語聖書，そのギリシヤ語訳を経て，新約聖書にも見られる。ヘブライ 2：6 では七十人訳の詩編 8：4 が引用され，「あなたが顧みられる人の子とは，何者なのか」（υἱὸς ἀνθρώπου ὅτι ἐπισκέπτῃ αὐτόν）がキリスト論的に拡大解釈されている。ここで人の子とは，キリストのことである。ルカ 7：16b において「神はその民を心にかけて下さった」（ἐπεσκέψατο ὁ θεὸς τὸν λαὸν αὑτοῦ）という表現が用いられている。ルカ 1：68には「ほめたたえよ，イスラエルの神である主を。主はその民を訪れて解放し」とザカリアの歌が歌われ，78節では，「これらは我らの神の憐みの心による。この憐みによって，高い所からあけぼのの光が我らを訪れ」と言われ，贖い，救い，高い所からのあけぼのと関連し，エピスコペオーは「メシア的」概念となっている。

この神の訪れは選びの民イスラエルに適用されただけではなく，異邦人も含まれる。使徒言行録15：14でヤコブは，「神が初めに心を配られ（ἐπεσκέψατο），異邦人の中から御自分の名を信じる民を選び出そうとなさった次第について

39　Kittel, (ed.,) ThWNT II, 600.

40　いわゆるヘレニストの 7 名が選立されたことについて，ここでは「執事」の制度が導入されたことではなく，パレスチナのキリスト者と，神殿礼拝を初めとするユダヤ教から自由なヘレニストのキリスト者との確執をルカがこのような出来事として決着させたことが記録されていると理解できる。W.G.Kuemmel, Kirchenbegriff und Geschichtsbewusstsein in der Urgemeinde und bei Jesus.Vandenhoeck & Ruprecht, 1943.参照。

は，シメオンが話してくれました」と語った。こうして，救済史を貫いて，神の heimsuchen（到来，訪問する）を意味するἐπισκέπτομαι が用いられていると言えよう。ここでようやく名詞形であるἐπίσκοποςについて論ずべき所に到達した。

2-2-4　聖書以外の世界でのエピスコポス

この言葉は「監督」（独 Aufseher 英 overseer）あるいは「見張人」（独 Wart 英 watch）と翻訳される。この元の意味が重なり，やがてキリスト教において展開されるような用語となったのである。ギリシヤ語の「エピスコポス」は，まず，「見張る者」（Waechter），「保護する者」（Schirmherr），「パトロン」（Schutzpatron）としての「監督する者」（Aufseher）という意味で用いられている。そこから，保護された人や世話の対象者を恵み深く見るというエピスコペオーの意味を反映しはしているが，世俗の「エピスコポス」は，それほど重要なものではなく，宗教的な含蓄もなく，何か技術的な，財務担当的役割を持つように任命された人を意味するだけであった。しかし，他方，「見張る者」あるいは「保護する者」の意味の背後に，通常神々がそのような働きをするということで，ある種の宗教的含蓄もあった。

ギリシヤ人は，何か超自然的，超人間的な力が顕現していると感じる時，そこに，ある神の存在を考えた。それはある種，人格化された諸力であり，世界の事物は，あらゆるものを支配する根源的な力に与かっている。神々は保護すべき人間たちや事物を見張っている。このような「保護者」あるいは「パトロン」として，ホメロスなどで神を「エピスコポス」と呼ぶ例証がある[41]。ゼウスが「証人にしてエピスコポス」と呼ばれている文献もある[42]。神々はまた単に保護者であるばかりか，見張る者として，悪い者たちを処罰する報復者でもあった[43]。バイアーによれば，「悪霊たち」（δαιμόνιον）が「エピスコポス」の

41　バイアー　前掲書，605．Hom Ⅱ　22，254f。

42　前掲箇所，Herodian　Hist. VII 10,3．その他，Pint Olymp 14,5 等。Aesch Sept c Theb 271f では神々は城塞都市のパトロンであるばかりか市場の保護者であると言われている。

43　Aesch Choeph 124ff.

役割を果たしている例証もあるという[44]。

むろん，人間たちも「監督」,「見張り人」あるいは「情報収集者」(Kundschafter)[45]と呼ばれている。人間の活動を表現するこの用語の意味はこうして多様であるが,「保護的な世話」(Die schirmende Fuersorge）が多様性の根底に流れている思想である。

公的職務の名称としてのエピスコポスについては，この語は，アテネの都市国家の官僚たちのタイトルとして用いられている。また，アテネに従属していたアッチカ連合都市にアテネから実質的な統治者として派遣された者たちが，エピスコポイと呼ばれている。彼らは幾らかの司法権も与えられていたらしい[46]。このような外交官的統治者はインドやエジプトにも派遣されていたらしい。このような他の都市や外国に派遣される公職の他に，エピスコポイは一般に地方の公務員あるいは協会の役員を指していた。神学的には，このような用法が，特に彼らが宗教儀式に関連づけられる時には，キリスト教的「エピスコポス」に近いと言えるが，この場合，彼らがいかなる仕事をしていたのかの厳密な定義はなく，漠然と,「監督」あるいは「管理の仕事」と関連していたのである。興味深いことは，法律家カリシウス（紀元340年頃）は公職のリストの中に，都市の貧民救援の仕事を司るエピスコポイを含ませていることである。また，当時の市民的公職のリストには,「執政官」,「財務担当者」,「秘書」などと並んで「エピスコポス」が登場する。

以上のような監督，管理職の担い手としての「エピスコポス」は宗教的色彩のある職名ではないが，ロードス島のアポロ神殿の維持管理の文脈でこの用語が登場する。しかし,「エピスコポス」は祭司職ではなく，あくまでも祭儀社会の純粋に世俗的義務の担い手であった[47]。こうして，世俗的ギリシヤ語一般の用例として，この称号は,「実に様々な職務を表示し得るのであり，この概念の背後に宗教的な表象が含まれるのは,『保護者，番人，パトロン』という

44 PPar63collX 9, 955, 10ff.
45 Hom II 10,38, 342. Soph Oed Col 112.
46 Beyer, 608.
47 Ibid.

意味の場合だけである」[48]と結論づけることができる。そして，グニルカは，この用語が具体的にいかなる職務を意味しているのか厳密に定義することは困難ではあるが，「それでも，殆ど常に含まれている表象は，その職務が何か監督的な，少なくとも管理者的なものであった」[49]と理解している。

2-2-5　ユダヤ教におけるエピスコポス

七十人訳においても「エピスコポス」は世俗的ギリシヤ語と同じように，二重の仕方で，つまり，一方では神について，他方では，いろいろの分野における監督者という意味で用いられている。むろん，ギリシヤ文化における多神論信念においては，各々の神がある人々や事物を見張る監督者たちとして行動する一方で，旧約聖書における唯一の神がこのような働きをさらに包括的になすことは見やすいことであり，ユダヤ教における神は万物を見る絶対的な「エピスコポス」である。ヨブ20：29ではヘブライ語「エル」の翻訳語として「エピスコポス」が用いられている。神は神に逆らう者の審判者である。フィロンも同じような思考の線上にある。彼は神をἔφορος καὶ ἐπίσκοποςと呼び[50]，また，ホメロスにおいてすでに用いられた「証言者にして監督」という表現も用いている[51]。神は，その目から，いかなる邪悪な者も身を隠すことのできないお方なのである。特に神は人の心を見られるお方である。「知恵の書」1：6では，この「証言者にして監督者」である神が，「人の思いを知り，心を正しく見抜き，人の言葉をすべて聞いておられる」[52]τῶν νεφρῶν αυτοῦ μάρτυς καὶ τῆς καρδίας αυτοῦ ἐπίσκοπος ἀληθὴς καὶ τῆς γλώσσης ἀκουστήςと言われている。神だけが，人の魂に隠されていることを見抜かれるのである[53]。

人間の職務としての「エピスコポス」は七十人訳でもそれほど詳しく定義されていない。しかし，「監督者・見張る者」の概念はいろいろ異なった仕方で

48　『ギリシヤ語新約聖書釈義事典Ⅱ』66.（J. Rohde）
49　前掲書　66.　J. Gnilka, Phil[HThK]38 からの引用。
50　Mut　Nom 39,216.
51　Leg All Ⅲ 43.上記注と共に Beyer, 610 に引用されている。
52　『新共同訳　続編付』
53　Migr Abr 81 und 115.

用いられている。Ｉマカベヤ書１：51で，アンティオコスはイスラエルを治める「エピスコポイ」を任命している。士師記９：28では，アビメレクは一人の代官（Vogt）を任命する。民数記31：14では，「軍の指揮官」（ἐπίσκοποι τῆς δυνάμεως 列王記下11：15参照）が言及される。列王記下12：11～12では，集められた献金が神殿工事の「役人である工事担当者」に渡され，彼らが諸労働者に支払いをしている。ネヘミヤ11：９，14，22にもベミヤミン族の人々，そして祭司とレビ人の「監督者」が登場する。列王記下11：18では，祭司ヨヤダは，主の神殿の「監督」と呼ばれている。その他，フィロンでは，モーセが「魂を知る人」という意味で「エピスコポス」と呼ばれている[54]。出エジプト記28：１に登場するエルアザルとイタマルは，ἐπίσκοποι　καὶ ἔφοροι と呼ばれている[55]。ヨセフェスにもこの言葉が用いられており，「道徳と法の護り手」のκπιτῆς と共に使われ，「警察官」を意味している[56]。

2-3　新約聖書における「エピスコポス」

それでは，新約聖書における「エピスコポス」について考察しよう。

2-3-1　フィリピ１：１における「監督たち」

教会の職制理解において，まず，重要なテキストは，フィリピ１：１においてパウロが用いている箇所である。パウロはその手紙をフィリピにいる「キリスト・イエスに結ばれているすべての聖なる者たち，ならびに監督たちと奉仕者たち」に宛てて書いている。（πᾶσιν τοῖς ἁγίοις ἐν χριστῶ ’Ιησοῦ τοῖς οὖσιν ἐν Φιλιπποις σὺν ἐπισκόποις καὶ διακόνοις）

この文章は教会の統治理解の歴史において二つの重要な問いを引き起こしてきた。第一は，いったい，ここで，複数形で「エピスコポス」と呼ばれているのは誰であるのかという問いである。第二の問いは，「エピスコポス」はいかなる時期から教会の会員たちの自由な相互活動の記述であることを止め，特

54　Rer Div Her 30. Beyer, 611 に引用されている。
55　Som II 186.
56　Ant 10,4,1. 以上　Beyer, Ibid.

別な職務，後の「ビショップ」の職務の担い手となったのか，という問いである。

まず，最初の問いを考察しよう。この職名が，世俗的ギリシヤ語において「会計業務関係の官吏」に用いられていた可能性を考慮し，また，手紙の挨拶の文脈で登場しているので，彼らはパウロの指示に従いエルサレム教会への献金を集めていた者たちであり，ここでパウロは，特にそのような財務担当者に感謝を述べているのだと推測する学者が存在する[57]。すると，「監督たちと執事たち」の両者が他者に対する奉仕者（διάκονος）ということになり，Bishop とは，元来，古代教会においては「見知らぬ旅人」を世話する仕事を担っていたという土井健司の主張にも通じるものがあろう[58]。

しかし，フィリピ教会の文脈においては，「監督たち」は，そのような他者，特に貧しい者たちへの奉仕に限定され，「教会の指導者たちとして，―― 使徒や預言者のようないわゆるカリスマ的指導者とはちがって ―― とくに実務的な奉仕と指導に当たった人々を指す」[59]としておくことが順当かもしれない[60]。

しかし，ここでさらに考慮すべきことは，このような「監督者たち」は家の教会の「管理」（Management or Administration）だけではなく，み言葉の教え（Teaching）をその働きに含んでいたかどうか，あるいは，教えることがその

57　『ギリシヤ語新約聖書釈義事典 II』67 頁。

58　土井健司氏は，「キプリアヌスの疫病 ―― 感染症とキリスト教」，そして，「最古の病院『バシレイアス』の思想 ―― レプラとキリスト教」について講演した。3 世紀半ばローマ帝国を襲った疫病は三割の住民を死に至らせたが，その際，キリスト教徒は病の人々を放棄・隔離するのではなく，寄り添うことによってかえってキリスト者人口を相対的に増加させたこと，そして 372 年頃カイサレア（現トルコのカイセリ）の司教バシレイオスが病院を建て，レプラを患う病貧者のケアを実施した歴史に触れ，病人であっても人間としての「いのちの尊厳」を持つという思想について展開した。バシレイオスについてはアンソニー・メレディス『カッパドキア教父』津田謙治訳，2011 年，47-79 頁参照。救貧施設群を設立したことは，56 頁。ナジアンゾスのグレゴリオスについては，前掲書，80-100 頁参照。土井健司『司教と貧者：ニッサのグレゴリウスの説教を読む』新教出版社，2007 年参照。

59　佐竹明『ピリピ人への手紙』15 頁。

60　Beyer は「巡回の，カリスマ的な福音宣教者，預言者，そして教師は決してエピスコポスと呼ばれていない」と言う。そして，この用語は，後で言及するキリストがエピスコポスと呼ばれているⅠペトロ 2：25 を除く，4 つの用例において，そこで日常的な行動がなされる地方教会が存在することを想定できる場所で生じると主張する。

中心的職務であったかどうかである。クラークは，フィリピ書においても，「監督たちと執事たち」はエフェソ4:11の「教える牧者」(τούς δὲ ποιμενας και διδασκάλους）のように「奉仕する監督者」を意味している可能性があることを示唆しながら[61]，それでは，「監督たちと執事たち」の相互区別が消滅してしまうので，必ずしも賛同できないと言う[62]。そして，結論的に，フィリピ教会の監督たちは，Ⅰコリント16：15～18のステファナ，フォルトナト，アカイコのような人物，Ⅰテサロニケ５：12に言及された指導的人物[63]，あるいは，ローマ12：7～8の「賜物ある人々」あるいはテモテとエパフラスという個人名と似たような働き手であったろうと推測している[64]。このような推論はパウロ時代の教会の「監督たち」に教える職務を含ませていることを意味している。クラークの著作の方法論的前提が，最近の歴史学的批判的方法論とは違って，パウロ本来の主要文書と第二次パウロ書簡，そして牧会書簡をそれぞれ区別して研究しないという前提であるから[65]，相互の書簡における奉仕者の職務の歴史的連続性を先取りしようとする意図がすでに前提されてしまっていると批判することができる。しかし，それらをあくまで「家の教会」という小さな家共同体の「指導的世話」の連続性という形で論じていることには，学ぶべき点があると言えよう。

こうして，フィリピ教会における「監督」に教える働きが含まれていたかどうかははっきり確定できないが，「監督」という呼称が用いられているあと３つ事例の中の一つ，つまり，使徒20～28において「監督」と「長老」がほとんど

61　Hawthorne, F. C., Philippians, Word Books, 1983，7.　Clarke, op. cit., 49 に引用されている。σὺν ἐπισκόποις καί διοκόνοις のκαι を epexegetical（補足説明的）に理解し，2 番目の称号が anarthrous（冠詞なし）なので，エフェソ 4：11 の「教える牧者」（τούς δὲ ποιμενας καὶ διδασκάλους）のように the overseers who serve と理解する。

62　Bockmuehl, Philipians, 54.は「この段階でそれが存在する限りにおいて，監督の役割は執事の役割から明確に区別されえない」と暗示しる。

63　「兄弟たち，あなたがたにお願いします。あなたがたの間で労苦し，主に結ばれた者として導き戒めている人々を重んじ，また，そのように働いているのですから，愛をもって心から尊敬しなさい」。

64　Clarke, op. cit., 50.　It's possible, but cannot be demonstrated, と控え目ではあるが。

65　Clarke, op. cit., Chapter One Methodological Questions と　Chapter Two Hermeneutical Questions 参照。

区別なく用いられている用例（パウロは長老という用語を決して用いていないが）は，「監督」の働きに教える働きが含まれてくる過程を示している。

使徒言行録20：28の前後の文脈は，エルサレルへの献金を決死の想いで届けようとするパウロがエフェソに使いを派遣し，ミレトスに集まった「教会の長老たち」（οἱ πρεσβύτερα τῆς ἐκκλησοιας教会は単数形）に決別説教をしたものである。突然，「聖霊は，神が御子の血によって御自分のものとなさった神の教会の世話をさせるために（ποιμαίνειν），あなたがたをこの群れの監督者（ἐπισκόπους）に任命なさったのです」というかたちで登場する。ここルカ文書では，「長老たち」と「監督者たち」は同義語であり，また，Ⅰペテロ２：25と同じように，「監督」の職務が「牧羊」のイメージと重なっていることは明白である[66]。そして，使徒言行録では，「聖霊」が主語となり，監督あるいは牧羊の内容対象が，「神が御子の血によって御自分のものとなさった神の教会」と表現されている。そして，その教会が「群れを荒らす残忍な狼ども」の攻撃に直面し，また，問題が外側から襲ってくるだけではなく，「あなたがた自身の中から」出てくる問題，つまり，教会内部の「異端」にも触れられ，監督する長老たちは，まず，自分自身のあり方，そして群れ全体に「心を配ること」（προσέχω）が勧められている。そしてこのような仕事は単に，家の教会の主宰・管理だけではなく，み言葉による群れの指導の役割を暗示している。「だから，わたしが三年間，あなたがた一人一人に夜も昼も涙を流して教えてきたこと（νουθετῶν νουθετέωの現在分詞　励ます，警告する）を思い起こして，目を覚ましていなさい。そして今，神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます。この言葉は，あなたがたを造り上げ，聖なる者とされたすべての人々と共に恵みを受け継がせることができるのです。」（31～32節）ここでは，パウロ自身が神の言葉によって励ましてきたことが述べられているが，パウロは群れの監督者たちに，パウロと同じ働きをするように求めており，それらを仲立

66　『ギリシヤ語新約聖書釈義事典Ⅱ』66 頁。他の町々での長老たちの任命については使徒 14：23 参照。ブルースは「長老」は主としてユダヤの先例に由来し，「監督」は主としてギリシヤの先例に由来するとしながら，「エペソの指導者たちは，長老，監督（すなわち，監督者），羊飼（すなわち，牧師）などと記されている。」としている。『使徒行伝』新教出版社，1958 年 449 頁。注 56 参照。

ちするのは,「神の言葉」であると主張している。バイアーはこの個所で,５つのことが重要なことであると指摘している。第一に,例外なくすべての長老たちが監督たちと呼ばれていることである。「彼らはその存在という点では(nach irem Sein)長老たちであり(年齢ではなく,その共同体の中での位置づけと信任による),その任務・使命の点では(nach ihrer Aufgabe)監督たちである」。第二に,この任務は,ここでは牧者より監督という用語が好まれてはいるが,Ⅰペトロ２:25と５:２以下におけるように,羊を飼うことであること,第三に,誰が上位かの区別なく,一つの会衆に幾人かの監督がいること,第四に,監督への召命は,聖霊によること。むろん,それによって,選挙(参照　使徒1:21以下,６:３以下)や一人の使徒,パウロ自身による任命(使徒14:23)を排除しない。第五に,この文脈から,監督たちの任務は,キリストの救いの働きに基づいて,「目を覚まし,思いやりをもって」教会を導くことである[67]。

少し長いが土戸清から引用する[68]。

> 「監督者」(episkopos)は,この文脈においては教会の指導者の意味で用いられているが,パウロ後の時代の教会においては,教会の職制(Order)としてのキリスト教内の職位を意味する語として用いられるようになっていく(Ⅰテモテ３:1-7参照)。制度としての教会,組織としての教会設立を抜きにしては,継続した「教会史」を維持発展させることはできない。組織と制度は硬直し,それ自体の存立が自己目的化される危険に絶えず直面するが,その危険を絶えず自覚しつつ,自己点検・自己評価の精神,すなわち,教会の変革を絶えず自らに求める教会である時,その起源するところに絶えず立ち返る謙虚さと勇気を持ち続けるであろう。また,そのことを通して,この世にある自らの存在の意義を絶えず確認しながら,教会のよって立つところと誰に顔を向けて教会の務めを遂行しているかを,見失うことはないので

67　Beyer, op. cit., 612.

68　土戸清『使徒言行録:現代へのメッセージ』日本キリスト教団出版局,2009年,281頁。

ある。

土戸清の主張は，パウロの霊的カリスマの教会からパウロ以後の新約聖書時代の教会，そして，イグナチィウスを経て，古カトリック教会が成立していく過程を，宗教改革の原理，「絶えず改革する教会」の視点を導入することによって批判的に継承していこうとする姿勢であるが，多少，直線的発展論であるとも評されよう。

ここで，第二の問い，つまり，「エピスコポス」はいかなる時期から教会の特別な職務，後の「ビショップ」の職務の担い手となったのかを検証するために，あと２カ所のエピスコポスの用例を検討しよう。

2-3-2　Ⅰテモテ３：2〜7とテトス７

Ⅰテモテ３：１においては，「監督（職）」は明確に，他の教会員とは異なった，「求め得る職務」とされている。そして，Ⅰテモテ３：２以下は，監督の資格付け[69]に言及している。

だから，監督は，非の打ちどころがなく，一人の妻の夫であり，節制し，分別があり，礼儀正しく，客を親切にもたなし，よく教えることができねばなりません。また，酒におぼれず，乱暴でなく，寛容で，争いを好まず，金銭に執着せず，自分の家庭をよく治め，常に品位をもって子供たちを柔順な者に育てている人でなければなりません。自分の家庭を治めることを知らない者に，どうして神の教会の世話ができるでしょうか。監督は，信仰に入って間もない人ではいけなせん。それでは高慢になって悪魔と同じ裁きを受けかねないからです。更に，監督は，教会以外の人々からも良い評判を得ている人でなければなりません。そうでなければ，中傷され，悪魔の罠に陥りかねないからです。

69　Beyer は，これはビショップ自身の職務機能（die Amtstaetigkeit）ではなく，単に前提条件（Voraussetzungen）を描写しているだけであると言う。(613)

ここでは，単数形が持ちられているが，これを単独司教制の萌芽と解釈するより，「類的単数」と理解されるべきである[70]。ここで，監督は，18の男性単数形容詞で表現されている。それらの中の12は，本質的資質に関するものである。「非のうちどころがない人」（ἀνεπίλημπτος），「覚めている」（νηφάλιος）「分別のある」(σώφρων)「品のある」(κόσμιος),「もてなしの心のある」(φιλόξενος)，「教えることのできる人」（διδακτικος），であり，「非難される点のない人」（ἀνέγκλητος）であって，「寛容で」(ἐπιεικής)，「善を愛し」(φιλάγαθος)，「正しく」(δίκαιος)，「敬虔な」(ὅσιος)，「自制的な」(ἐγκρατής）でなくてはならない。

あとの６つは，監督に相応しくない人に関する用語が，否定のμὴを伴って用いられ，「高慢」(αὐθάδῆς)，「怒りっぽい」(ὀργίλος)，「貪欲」(ἀισχροκερδής)，「争いを好む」(ἄμαχόν)，「金銭に執着する」(ἀφιλάπγυρον　このふたつはἀによる否定形)，ことが批判されている。また，信仰者になって間もない人（νεόφυτος）もμὴによって拒否されている。また，「酒におぼれず，乱暴でない人」(μὴ πάροινος, μὴ πλήκτης）が挙げられているが，これはテトスにも言及されている。その他テモテとテトスに共通の言葉は,「分別のある」(σώφρων）と「もてなしの心のある」(φιλόξενος）である[71]。

このようにテモテとテトスのリストに重複している用語が少ないのは，クラークによれば，このようなリストが当時「定型化されてもおらず，完全なものでもない」ことを意味しており，これらの形容詞の特徴は，教える能力のほか，また，家を治めることが類比的に語られているほかは，監督に要求されるスキルについてはほとんど語っていないことであり，監督の職務（ἐπισκοπή）は，単なる善い働き（καλόν　ἔργον　Ｉテモテ３：１）というよりむしろ，名誉職的なあるものであったのかも知れないと推測している[72]。

クラークによると，新約聖書においては，監督者のスキルについては，Ｉテ

70　岩波訳『新約聖書』注 13，715-716 頁参照。

71　A.D.Clarke, op. cit., 50.　Beyer, op.cit., 613 は，このリストから，まず，何か特殊な神秘主義的達成は求められておらず，道徳的信用性が要求されており，過剰なものを避け，名誉にあたいし，例証となる生活を指導することが監督に求められていると言う。

72　Clarke, op. cit., 50-51.

モテ３：２の「教えること」（テトス１：９）の他，ほんの少ししか言及されていないが，それに加えて，家の教会を「管理すること」（προΐστημι）の２つのことが求められている。この管理能力は「自分の家庭を良く治め，常に品位を保って子供たちを柔順な者に育て」（Ｉテモテ３：４），「一人の妻の夫であり，その子供たちも信者」に導くという，家庭の管理と教会の管理との類比によって示されており，「監督は神から任命された管理者」（ὡς θεοῦ οἰκονομος テトス７）であると言われている。Ｉテモテ３：５は「自分の家庭を治めることを知らない者に，どうして神の教会の世話ができるでしょうか」（εἰ δέ τις τοῦ ἰδίου οἴκου προστῆναι οὐκ οἶδεν, πῶς ἐκκλησίας θεοῦ ἐπιμελήσεται）と語る[73]。管理の能力とはリーダーシップを発揮し，大企業のような団体を目的合理的に導くというイメージより，むしろ，家の規模の教会に集まる人々を家のメンバーのように世話をするというイメージである。こうして，「明らかに監督に関して２つのセットになったスキルが存在する。適切に理解されて，知ること，そして神の言葉を教えること[74]，そして，第二に，少なくとも人々の小さな共同体を導き，世話することができることである。この特質のリストはこの二つのスキルを明らかにするものと見られねばならない。他言すれば，この教えることと管理することが温和な仕方で（in the manner of the qualities of moderation）行使されるのである」[75]。少なくとも，牧会書簡における「監督」の仕事はそのような二つに要約されよう。それでは，このような働きを担う監督は一つの家の教会に複数存在していたのだろうか。フィリピ教会における「監督たち」と牧会書簡における「監督」のあり様は決して同じであったという確証はない。

73　Ibid. Beyer は前述の働きに加え，監督に求められている第二のことは，会衆の生を導くにあたり，監督自身の家を治める能力が求められていると言う。この点においてローマ・カトリックの独身制は聖書と真逆である。聖書は監督の一夫一婦的結婚を前提にしている。家庭内の統治の能力は，会衆を指導する能力の一つのテストである。(613)

74　Beyer はこのリストにおいて，監督職に求められている第三は，教えることに賜物があり，説教者に適しているべきことであると言う。そして，第四に，監督は自ら誇ったり，人を躓かせないように信頼のおける成熟したキリスト者（ein bewaerter Christ）でなければならない。そして。第五に，監督は，その仕事のために非キリスト教環境世界の基準にてらして，非難のない者であらねばならない，と指摘している。

75　Clarke, op. cit., 52.

クラークは，「ありそうなことは，各々の監督が，彼自身が属する共同体に責任をもっているフィリピ1：1のように，牧会書簡におけるこの章句は，[単数形ではあるが]監督たちという複数性を前提しているということである」[76]という。クラークは，バイアーとは違って，各「家の教会」に家長としての監督がおり，フィリピの町には複数の家の教会が存在し，その家の教会の集合体が「フィリピ教会」を形成していたと考えているように見える。また，牧会書簡の監督も各個教会を越えた，一人の監督が存在していたのではなく，家の共同体のそれぞれに存在した監督たちが「類的単数」で言及されていると解釈している。

テトス1：5〜9は，使徒言行録14：23においてパウロが小アジアでなしたように，テトスがクレタの諸都市ごとに「長老たち」を任命すべきことが言及され，長老の任命の文脈に突然「監督」が登場している。ここでも，使徒言行録のように「長老」と「監督」は交換可能な用語に見える。

> あなたをクレタに残してきたのは，わたしが指示しておいたように，残っている仕事を整理し，町ごとに長老たちを立ててもらうためです。長老は，非難される点がなく，一人の妻の夫であり，その子供たちも信者であって，放蕩を責められたり，不従順であったりしてはなりません。監督は神から任命された管理者であるので，非難される点があってはならないのです。わがままでなく，すぐに怒らず，酒におぼれず，乱暴でなく，恥ずべき利益をむさぼらず，　かえって，客を親切にもてなし，善を愛し，分別があり，正しく，清く，自分を制し，教えに適う信頼すべき言葉をしっかり守る人でなければなりません。そうでないと，健全な教えに従って勧めたり，反対者の主張を論破したりすることもできないでしょう。

ここで語られている「長老」の資格はテモテ3：2以下のものに似ており，「長

76　Ibid.

老」と「監督」とが同じ事柄，つまり，会衆の導きと代表，そして，使徒や預言者あるいは教師がいない時に，説教と礼拝の司式をすることに言及しているように見える。パウロが決して「長老」という言葉を使わなかった段階から，使徒言行録の「長老」と「監督」の用語の交換可能性の段階を経て，多分，初期の両者の区別は，Ⅰテモテ5：17，「良く指導している長老たち，特に，御言葉と教えに労苦している長老たちは二倍の報酬を受けるにふさわしい」の中に見られるだろう。ここでは，「監督」という用語は登場しないが，「長老」が教会としての権威を付与され，後の監督制への一つの歩みだしを見ることができよう[77]。

2-3-3　「エピスイコポス」としてのキリスト：Ⅰペトロ2：25

新約聖書の「エピスコポス」の5つの用例の中の一つに教会の職務ではなく，イエス・キリスト自身が「監督」と呼ばれている用例がある。聖書以外の用例でも，神々が世界を見渡し，世話をするという用例があることをすでに指摘した。また，ヘブライ語聖書の七十人訳では，監督と羊飼の職務が結びつけられ，主なる神ご自身が，イスラエルの民を世話されるという告白にも言及し，神の「訪問」は審判と恵みの両方を意味すると言った。それゆえ，新約聖書の「エピスコポス」の5つの用例の中で最初にこの用例に触れるべきであったのかも知れない。神ご自身あるいはそのメシアが「良い羊飼であり，監督者である」ことは，まさに，教会の監督職の大前提であり，教会の監督の働きの基礎だからである。しかし，この論文の趣旨が教会の職務としての「エピスコポス」理解であったため，このような取扱い順序としたのである。Ⅰペトロ2：25は以下のように告白する。

> あなたがたは羊のようにさまよっていましたが，今は，魂の牧者（ὁ ποιμήν）であり，監督者（ὁ ἐπίσκοπος）である方のところへ戻ってきたのです。

77　Beyer, 614.

現在のバプテスト教会は通常，そのリーダーに「牧師」という呼称を用いるが，教会の職務としてのその呼称はエフェソ4：11に生じるのみである。むろん，キリストに「牧者」が用いられている証例は他に数か所あり（ヨハネ10：11，14，16，ヘブライ13：20），また，キリストが羊飼としてのメタファで語られていることはさらに多い。しかし，この個所では，「監督」と「牧者」がほとんど同義語として，共に生じている。そして，5章では，教会の役職者は「長老」と呼ばれ，以下のように戒め，励まされている。（5：1～4）

> さて，わたしは長老の一人として，また，キリストの受難の証人，やがて現れる栄光にあずかる者として，あなたがたのうちの長老たちに勧めます。あなたがたにゆだねられている，神の羊の群れを牧しなさい。強制されてではなく，神に従って，自ら進んで世話をしなさい。卑しい利得のためにではなく献身的にしなさい。ゆだねられている人々に対して，権威を振り回してもいけません。むしろ，群れの模範になりなさい。そうすれば，大牧者がお見えになるとき，あなたがたはしぼむことのない栄冠を受けることになります。

Ⅰペトロの成立はドミティアヌス帝（81－96年）の迫害下と見られているが，上記の引用文では，「牧師（牧者）」と「監督」がほぼ同義語として用いられており，教会の役職には「長老」が充てられているが，「監督」あるいは「牧者」が，教会の役職ではなく，排他的にキリストを指して用いられているのかどうかは一つの問いである。しかし，もし，そのような役職が教会にあったとすれば，それはキリストを指し示す役割を持つ者であり，キリストとの類比で用いられていることは，この個所も，教える職務としての「監督」を暗示している箇所として理解できるし，また後の bishop 理解への移行を示しているといって良いであろう[78]。

78　岩波の『新約聖書』では，使徒行伝の成立が 90 年代（荒井献），牧会書簡は 100 年前後（保坂高殿），Ⅰペトロはドミティアヌス帝の迫害下，81-96 年頃（小林稔）としているので，使徒言行録 → 牧会書簡 → Ⅰペトロではなく，使徒行伝 → Ⅰペトロ → 牧会書簡となるが，年代設定は不確定要素が多く，年代に大差はなく，また，時間的，直線的に発展したというより，空間的広がりや多様性があったであろうから，「長老」と「監督」がほとんど同義語であり，家の教会の管理の仕事と群れを教える仕事が共存していた段階から，「長老」が教会のみ言葉の教えに特化する段階，そして監督制へと移行する時期は必ずしも確実に言えない。

2-4　その後の教会史におけるエピスコポス

最後に，新約聖書に用いられた５ヵ所の「監督」と，後の「監督制」との歴史的関連性に言及しておこう。最初に，世俗のギリシヤ語文献における「エピスコポス」とキリスト教の諸会衆の指導者のモデルとしての「エピスコポス」との歴史的関連はないというバイアーの主張を確認しておくことが大切である[79]。では，ユダヤ教との関連はどうであろうか。バイアーは，ユダヤ教シナゴーグのἀρχισυνάγωγος とὑπηρέτης がフィリピ教会のἐπίσκοποςとδιάκονοςのモデルとなったと主張するゲッツの考え方に言及している[80]。確かに，シナゴーグと初期キリスト者の礼拝の間には類似性があるように，事実ユダヤ教とキリスト教の祭儀的職務の間には多くの実質的な並行が存在している。シナゴーグの指導者は礼拝を司式し，外的秩序を監督し，建築物の手当てをしている。また，ἀρχισυνάγωγοςとπρεσβύτεροςの働きも重複していることであろう。このような類似性も存在するが，重要な相違に目を向けることも大切である。バイアーは，シナゴーグの指導者は，信仰や愛の交わりとしてその会衆の導きにはほとんど関与していないと言う[81]。

バイアーはさらに，J.エレミアスの見解に触れる。エレミアスはキリスト教の監督たちのモデルとしてダマスコにあったパリサイ派の新しい契約共同体の指導者たちを上げているらしい[82]。そこでの指導者である מבקר は入会許可と除名の責任を持ち，教師でありまた説教者であった。彼は共同体を子どもを持つ親のようにまた羊を世話する羊飼いのように扱うことが期待されていた。彼は司法的責任と多くの外的な事柄における権威をも有していた。しかし，このモデルはキリスト教の監督よりも強い君主的色彩を帯びており，聖書で語られている初期のエピスコポイというより三世紀の監督に近いし，このようなパリサイ派指導者たちに関する資料が圧倒的に少なく，確かなことは言えないとバイアーは考えている。そして彼は，福音の説教とそれに従って生きるという大

79　Beyer, 614.

80　K. G. Goetz, Petrus als Gruender und Oberhaupt der Kirche und Schauer von Gesichten (1927), 49ff. Beyer, op.cit., 614.

81　Ibid.

82　J. Jeremias, Jerusalem zur Zeit Jesu. II, 1 (1929).

きな委託命令を受けたキリスト教会の「新しさ」はそれに対応した職務理解を造りだしたはずであると考え，ユダヤ教とキリスト教の並行的職務を強調することには消極的である。初代の弟子たちは，十字架につけられ，よみがえらされたキリストから直接，福音宣教の働きを委託されたのであった。それは決して移譲可能な働きではなかったのである。使徒たちが神から与えられた言葉の力を通して教会を建てる賜物と権威を聖霊から受け取ったように，預言者たちと教師たちは決して死に絶えることはなかった。彼らはパウロがそうであったように，彼らの使命を遍歴の宣教活動によって行った。しかし，回心者が与えられ，そこに家の教会が誕生すると，使徒も預言者あるいは教師もいない所で群れを形成する奉仕者が必要とされた。κυβερνήσεις（管理者あるいは管理の仕事）も霊の賜物を必要とした。（Ⅰコリント12：28）そして本来，外的な関心事であると考えられたものが，その会衆の内的かつ外的葛藤において牧会的指図を必要とする大いに責任ある仕事になっていった。そこに礼拝を司式し，説教する仕事も加わった。これが，使徒言行録14：23で言及されているパウロとバルナバの使命であった。「弟子たちのため教会ごとに長老たちを任命し，断食して祈り，彼らをその信じる主に任せた」。Ⅰテサロニケ5：12やローマ12：8の「指導者たち」（προϊστάνενοι）も同じようは働きを担った人々であったろう。そして，家の教会のこれらの指導者たちが，フィリピ1：1で言及されている「監督たちと執事たち」なのである。これらの職務は，初期の霊的運動における使徒たち，預言者たちそして教師たちがいなくなった後にも存続したのである。こうして徐々に彼らが教会生活の屋台骨となった。

「監督」という称号も，その働きが生じたのと同じような仕方で生まれたと言ってよいであろう。ユダヤ人キリスト者には，πρεσβύτεροςという用語が使い慣れたものであったろう。しかし，ヘレニストキリスト者は，エフェソとフィリピにおけるように，ἐπίσκοπος とδιάκόνοςという用語を導入した。これらの用語はヘレニズム世界においては広く知られたものであったが，いまだ，正確には定義されておらず，それゆえ，それらの意味は新しくまた特別なものとして用いられることが可能であった。キリスト教徒たちは，何か特別な霊的権能の主張を引き起こさない穏当な言葉を選んだのである。この二つの呼称は，「使

徒たちと預言者たち」の背後に退くべき用語であった。（Ⅰコリント12：28参照）。しかし，この呼称は決して内容のないものではなく，διάκονοςについては，イエスご自身が，弟子としての務めの中心的な姿勢として示されたのである。（マルコ10：43～45）。エピスコポスについては，イエスご自身がエピスコポス（羊飼いと重なる群れの監督者）として到来されたその時に至るまで，ホメロスの時代から神的存在や行動に適用された豊富な歴史があり，それがその言葉に織り込まれていったのであろう。

エピスコポスが「使徒継承」（apostolic succession）の要と考えられるような伝承は新約聖書の中にはないが，Ⅰテモテ5：17に「よく指導している長老たち」と「その他の長老たち」との区別が見られ，「よく指導している長老たち」は二倍の栄誉と報酬が支払われるべきであるとされた。Ⅰクレメンス42～44にはいまだ「監督」と「長老」の平等性が保たれている。にもかかわらず，クレメンスは二つの方法でこれらの用語を発展させたとバイアーは主張する。

まず，彼は監督たちと執事たちは，使徒たちによって制度化されたという教えを発展させた。こうして，神 → キリスト → 使徒たち → 監督たち（司教たち）→ 執事たち → 一般の信徒たち，という階層的梯子を導入した。第二に，イザヤ60：17の彼自身の翻訳，マソラ本文や七十人訳と違っているテキストにおいて，これら監督たちと執事たちのための聖書的確証を提供している。καταστήσω τοὺς ἐπισκόπους αὐτῶν ἐν δικαιοσυνῃ καὶ τοὺς διακόνους αὐτῶν ἐν πιστει 「わたしは義において監督たちを，信実において執事たちを任命するであろう」。監督と執事は旧約聖書以来の神の定めた教会秩序であるというのである。

『ディダケー』は，カリスマ的宣教者たちがそこを去るか死んだ場合，監督たちと執事たちが彼らの働きを継承すべきであると語っている。これがディダケー15：1の趣旨である。「彼等（つまり監督たちと執事たち）もまた預言者たちと教師たちの職務をあなたがたに与える。それゆえ彼らを軽んじてはならない。なぜなら，彼らは預言者たちと教師たちと共にあなたがたの指導者たちだからである」。このようにして時の経過と共に，選立された職務の重要性が徐々に増し，彼らの間では，監督の職務が長老たちや執事たちの職務を凌駕す

るようになる。バイアーによれば 2 世紀初頭のシリアと小アジアでは，初めに諸教会を導いていた監督の仲間集団が君主制的監督に取って替わられるようになった。

イグナティオスは当時の教会指導者であったが，彼の書簡の中でこのような過程を証言している。しかし，教会論的領域においては，このような組織された指導性は，ただ単にその時代制約的な社会の意思の一つの表現に過ぎないというコンテクトから離れ，普遍妥当的に，何が永遠の真理であり，何がそうではないかを決定する最高の権威を所有すると主張される危険を伴っているのである。しかし，いかなる人間も真理そのものをコントロールすることはできない。真理そのものが真理を護るのである。「監督・司教」でさえ，ただこの真理に仕えることができるのみである。そのような限定を考慮しながら，イグナティオスの見解に耳を向けよう。

クラークは『スミルナ人への手紙』（Smyrn） 8：1～9：1 を引用する[83]。

> あなたがたすべではイエス・キリストが父なる神に従ったように，監督（ἐπίσκοπος）に従わねばならない。そしてあなたがたが使徒たちに従うであろうように長老会（πρεσβυτέριον）に従わねばならない。神の命令として，執事たち（διάκονοι）を尊重しなさい。誰もその監督（の裁可）なしで教会に関する何ものもなしてはならない。監督の権威の下での，あるいは彼自身が指名する人の下でのユーカリストだけが有効であると考えられるべきである。キリストが現臨する所に普遍的な教会が存在するように，その監督がそこにいる場所に，会衆があるようにしなさい。監督なしでは，バプテスマも愛餐も可能ではない。しかし，あなたがたがなすあらゆることが信頼するに値し，妥当性があるために，監督が許すあらゆることは同様に神が喜ばれる。…神とその監督を認識することは素晴らしいことである。

83　Clarke, op. cit., 54.

ここでは，父なる神 → キリスト → 監督 → 教会，使徒たち → 長老会 → 教会というヒエラルキーが明確であり，神と監督がほぼ一つとされている。そして礼典の執行権が監督に制限されている。そして監督の存在なしで教会は存在しないと言われ，監督が全教会を代表している。

また，クラークは『スミルナ人への手紙』に加えて，『エフェソ人への手紙』や『トラレイス人への手紙』からも引用している[84]。

「なぜなら，われわれの切り離しえないいのちであられるキリストは，世界中で任命された監督たちがキリストの心の中にあるように，イエス・キリストは，父の心の中に存在する」（エフェソ 3.2）。「だれかがその監督が沈黙を守るのを見れば見るほど，人はますます彼を恐れるべきである。なぜなら，その家の主人（キリスト）が彼自身の家を管理するために送るあらゆる人を，われわれは彼を送るその人を歓迎するように歓迎せねばならない。それゆえ，われわれはその監督を主ご自身のようにみなさねばならないことは明白である」（エフェソ 6.1）。「執事たちをイエス・キリストのように尊敬せよ。それは彼らが，父なる神のモデルである監督を尊敬すべきであるのと同じである。そして，長老たちを神の協議会として，そして使徒団として尊敬すべきであるのと同じである。それらなしでいかなるグループも教会とは呼ばれえない」（トラレイス 3.1）「諸悪の根源である分派・分裂から遠ざかりなさい。あなたがたはすべて，イエス・キリストが父なる神に従ったように監督に従わねばならない。そして，使徒たちにしたがうように，長老たちに従わねばならない。だれでも，教会との関わりをなすとき監督なしで何もしてはならない。監督の権威（あるいは彼自身が指名した者）の下でのユーカリストだけが正当性があると見做されるべきである。（以下前掲引用文に重なる　スミルナ人への手紙 8.1-2）

84　Ibid., 11-12.

このような監督制は，バイアーが指摘するように，迫害下あるいは異なった教えの嵐の緊急事態においては，あるいは意味を持つかもしれないが，これが正当な教会秩序であるとか，その後の教会史に永続的に妥当する秩序であるとかは言えないであろう。

3．「エピスコポス」と似た働き：προΐστημι

元来，最初期のキリスト教会の職制を表す「監督」，「長老」そして「執事」について論じる予定であったが，研究時間や紙幅の限界で「監督」だけを研究するに終わった。しかし，ここで，監督，執事，そして多くの長老たちの奉仕の通奏低音として流れている一つのスキル，つまり，家を導くこと，あるいは管理すること（προΐστημι）を記憶すべきであろう。クラークは彼の著書において「集合的タイトル」（A Collective Title）という項目でこの用語を取り扱っている[85]。

「プロイェスティーミ」の原義は「前に置く」という意味であるが「ある人を他者に対して前に置く」ということで，「主宰する」（preside），「指図する」という意味に展開される言葉である。「エピスコポス」に関しては，「自分の家庭をよく治め」（Ⅰテモテ3：4）と言われ，「執事」に関しても「自分の家庭をよく治める人でなければなりません」（Ⅰテモテ3：12）とあり，また「長老」のある者たちに関して「よく指導している長老たち」（οἱ καλῶς προεστῶτες πρεσβύτεροι（Ⅰテモテ5：17）と語られ，完了分詞の複数形が用いられている。また，この動詞はローマ12：8において賜物のある個人に関しても用いられ，「指導する人は熱心に指導し」と翻訳されている。またⅠテサロニケ5：12では，テサロニケ教会の指導者たちのグループ全体に対しても，主に結ばれた者として「導いている人々」として現在分詞型が用いられている。

ローマ12：8における「指導する人」への言及は，預言者，教師，そして勧

85　Clarke, op. cit., 71-74.

告する者/説教者を含む，種々の賜物を与えられた個々人のリストの一部として登場する。Ⅰテサロニケ5：12は指導者たちについての最初期のパウロの言及であり，彼らの指導する仕事を兄弟たちの間で「労苦すること」(κοπιάω) そして主において兄弟たちを「戒めること」(νουθετέω) という三つの現在分詞の中間に登場させている。これらの用語の最初の分詞は，Ⅰテモテ5：17においてοἱ κοπιῶντες ἐν λογῷ καὶ διδασκαλίᾳ「み言葉と教え」に仕えるという長老たちの働きに関連して用いられている。そして，それはまた，ステファナスの家における指導者たちの仕事を記述する際にも登場する。「どうか，あなたがたもこの人たちや，彼らと一緒に働き，労苦してきた（κοπιῶντι）すべての人々に従ってください」(Ⅰコリント16：16)。そしてローマ16：6と12で言及される3人の女性たち（マリア，トリファイナ，そしてトリフォサも主のために「労苦して働いている」。そして，何よりもパウロ自身が繰り返し自分自身の働きに対してこの動詞を用いている（ガラテヤ4：11，フィリピ2：16，コロサイ1：29)。パウロにとって使徒職のしるしはその権威・特権というより，主とその教会のために苦悩し，労苦することであった。また，νουθετέωについては，パウロは単に勧告するだけでなく（Ⅰコリント4：14)，信徒相互が適切なしかたで勧告し合うことを彼の手紙の多くの読者たちに勧めている（ローマ15：14，Ⅰテサロニケ5：14，Ⅱテサロニケ3：15)。この用語は仲間の信徒たちの霊的，道徳的あるいは倫理的行為に挑戦することを暗示している。

以上の個所の考察から，Ⅰテモテ3：4，12，5：17に用いられている「プロイェスティーミ」という動詞は，保護すること，防御すること，支援することあるいは世話することと関連した指導性を指していることが明白である[86]。も

86　Knight, The Pastoral Epistles, 161p はⅠテモテ 3：4-5 において動詞προΐστημιとἐπιμεκέοναιとを関連させている。それによって προϊστάμενοςの指導することよりもむしろ世話をし，牧会する働きを強調している。R.W. Gehring, House Church and Mission 198-9 はこの語の「世話人」と「支配者」の面を関連づけ，それらをグレコローマン世界では互いに排他的でないものと考えている。確かに，パトロン的人物は人々を世話する義務を持っていた。彼は支援（helping）と指導すること（directing）という同じ概念セットをⅠコリント 12：28 における用語ἀντιλήμψειςとκυβερνήσειςの並行的ペアによっても見出し，そしてローマ16：2では保護の概念がパトロン的言葉προστάτιςによって表現されていることを指摘している。

しこの言葉がこのような意味を持っているとしたら，教会の指導者の働きは，家長としての働きとの類比で理解され，その類比は，教会における指導性の本質を規定していることを認めねばならないであろう。他言すれば，他者を支援し，苦労することと指導することを結びつける「プロイェスティーミ」が暗示する教会指導者は，大企業経営者の目的合理的指導力というイメージではないということであり，もし，教会が大規模化するとしても，その教会はそのような小集団の結合体という質を持たねばならないだろう。そして，家の教会の指導者たちを同定する記述的用語として，動詞「プロイェスティーミ」は，パウロ書簡の最初期と牧会書簡という最後期の両方を繋いでいるとクラークは主張する[87]。そして，クラークは，パウロがフィリピ１：１で用いている「監督たちと執事たち」という明白なタイトルは，「プロイェスタメノイ」と交換可能であると言う。そして，テトスが言及される手紙が当てられたクレネにある教会は，執事を持たない初期の段階であり，フィリピの教会は，いまだ「長老たちの協議会」を必要としない段階の教会であり，１）原理的には，サイズと家の教会の数に拠っているが，それぞれ異なった諸教会は「監督」,「長老」,「執事」の３つの職務の異なった仕方の結合状態を持っていたこと，２）ある所与の場所におけるあらゆる指導者たちは，彼らのタイトルにかかわりなく，ひとつの集合的用語である「プロイェスタメノイ＝指導者たち」によって合理的に認識可能であったこと，３）多分（獄屋の場所によるが）50年代後半におけるフィリピにおける「監督たちと執事たち」の明確な存在，そして50年代中ごろの，ローマ書を書いている時代の「執事」の存在は，たとえ「テサロニケの信徒への手紙」に「監督」,「長老」,「執事」への言及がないとしても，新約聖書文書の最初期における家の教会にも，「プロイェスタメノイ＝指導者たち」で表現される彼ら自身の監督たちそして多分長老と執事たちを持っていたことを排除しないように思える，と結論づけている[88]。この論文では，「長老」と「執事」についての詳細な吟味がなされていないので，一つの結論を出すことは難しいが，このようなクラークの主張は，初代教会が「家の教会」あるいは

87　Clarke, op. cit., 73.
88　Clarke, op. cit., 74.

「家の教会の集合体」であったこと，そこでの指導性は，家の管理責任者としての責任が主なことがらであり，教え，勧告するという働きが，家に集う人々を世話し，支援するということ，そのために労苦することと結びついていたことに気づかせてくれる点で意味のある主張である。

4．パウロが拒否したタイトル

クラークは最後に，「語られていないタイトル」（Missing Titles）という表題でパウロが敢えて使用しなかった呼称を検討している。
この論文では，「監督」（エピスコポス）の働きについて考察してきた。その際，「エピスコポス」が新約聖書には5回しか登場しないこと，そして，他の「長老」，「執事」のタイトルもパウロ文書では，ただ稀にしか用いられていないことに気づいてきた。このような考察に加えて，パウロが教会における「指導性」を考える際，あえて使用しなかった概念あるいは呼称があるということに気づくことも意味あることであろう。

パウロは，ローマ13：3，Ⅰコリント2：6でἄρχωνを用いて，帝国の支配者たち，その時代の支配者たちに言及しているが，この用語を決して教会の指導者としては用いていない。この用語は，共観福音書と使徒言行録では，つまり，ルカ文書では会堂の支配者，パリサイ派の指導者，ユダヤ人の指導者，悪魔的指導者，異邦人の指導者たち，異邦人のある指導者，官憲，そして一般的支配のためのタイトルとして用いている。それは当時の一般的使用法を反映していると言えよう。これと関連した言葉は，ἀρχηγόςであり，それは七十人訳において，特に人々の非常に大きな集団の重要な指導者を表すためにしばしば用いられている。しかし，新約聖書においては，この用語は，「高く挙げられたキリスト」についてのみ用いられ，パウロ文書には生じない。この言葉に関連した用語をパウロは教会にとっては不適切なものと見ていたと推測される。それらは「支配すること」の意味が強く，しばしば，至上権あるいは帝国的コンテクストで用いられるものであった。

現在分詞のἡγούμενοςはしばしば，προϊστάμενοςと類似性を持つと見做され

ている。新約聖書では，イエスへの言及において旧約聖書の預言の引用で登場する。「『ユダの地，ベツレヘムよ，お前はユダの指導者たち（ἡγεμόσιν）の中で決していちばん小さいものではない。お前から指導者（ἡγούμενος）が現れ，わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』」（マタイ２：６）。そして，キリスト教の指導者たちをも意味しうる。「選ばれたのは，バルサバと呼ばれるユダおよびシラスで，兄弟たちの中で指導的な立場にいた人たち（ἄνδρας ἡγουμένους）である」（使徒言行録15：22ｂ）。「あなたがたに神の言葉を語った指導者たちのことを，思い出しなさい。指導者たちの言うことを聞き入れ，あなたがたのすべての指導者たちによろしく」（ヘブライ13：７，17，24）。この言葉は，使徒言行録14：12ではパウロを言い表すために用いられている。しかし，パウロ自身は，キリスト教会の指導者たちを記述するためには決してこの言葉を用いない。（異なった意味で，フィリピ２：３に用いられてはいるが）　この事実は重要である。この用語は，七十人訳では「専制的支配者たち」あるいは「国の支配者たち」と関連して用いられていた。それはまさに支配することそして命令する権力を持つことを意味していた。ルカ22：26の主イエスの言葉「より大いなる者はより小さな者に，導く者は（ὁ ἡγούμινος）仕える者になるべきである」を知っていたであろうパウロは，この用語をキリスト教信仰共同体の指導者に用いることを避けたのであろう。むろん，「家の諸教会」という小規模の共同体，「家庭・家族」というセッティングには，「ヘグウメノス」はもとより馴染まなかったであろう。

５．結論

バプテスト教会は伝統的に，教会の職制として「牧師」と「執事」という名称とそれぞれの仕事を考えてきた。しかし，新約聖書には「牧師」という用語はまれで，一度「魂の牧者であり，監督者」であるキリストについて用いられ，第二次パウロ書簡であるエフェソ４：11に一度生じるだけである。教会の指導者を指す言葉としての新約聖書用語は「監督」，「長老」そして「執事」である。むろん先の引用文が示すように，「監督」と「牧師」が交換可能な同義語のよ

うに用いられており，また教会とその指導者たちを羊と羊飼のメタファで描く伝統は豊富である。

しかし，監督教会の伝統への反発からか「監督」という用語を避けるバプテスト教会は「監督」の呼称が持つ，群れ「全体を見張る」という働きをどこかないがしろにしてはこなかったか。サッカーにせよ，野球にせよ，実際にプレーはしないが，選手たちの個性を見抜き，働きを動機付け，自己鍛錬を支援し，作戦を練る「監督」の役割は大きい。「監督」（本来「羊飼も個々の羊と群れ全体の面倒を見るという働きなのではあるが」という用語を失ったことで，教会全体の見張り，世話する仕事をせず，信徒の働きを奪い，何でも自分で行ってしまう牧師，あるいは監督という仕事を放棄して，普遍妥当的，抽象的な（教会員の共通意識形成，教会形成に繋がりにくい）説教を専ら担っている牧師になっていないだろうか。

他方，私自身は，1970年代に牧師になったこともあり，信徒たちが生き生きと奉仕できるように「整える」（エペソ４：11），会衆の「ディレクター」あるいは「コーディネーター」としての牧師像の影響を受けてきた。み言葉の説教は基本であり，中心的働きではあるが，教会のヴィジョンあるいはミッションを明確にし，その実現のために適切な目標を定めて信徒たちと共有し，具体的なプログラムを立案，共に汗を流して実行する，ある種の「目的合理的な」教会形成を実践してきた。しかし，ともすれば，そのような教会は成功する企業のミニチュア版にならないだろうか。神学部の大学院で「教会形成と牧師の指導性」を講義するものとして，教会の指導性について日頃からあれこれ考える者であるが，この小論では「監督」（エピスコポス）という用語の意味と働きの内容を吟味し，教会形成におけるリーダーシップ理解の一助とした。

5-1　僕として「仕える者」

キリスト教会の使命達成を担う教会の指導者の根本的姿勢，そして働きは何よりもまず，主イエスとその教会に「仕える」僕の働きであることをマルコ10：42～45を通して，また初期教会のヘレニズム社会一般で用いられた指導言語の新約聖書における「不在」を通して学ぶことができた。こ

れは，教会における指導者の出発点でありまたゴールである。

5-2　ヘレニズム社会の「支配」を表現する語彙の回避

イエスの教えに影響されたのか，新約聖書においては当時ヘレニズム社会で一般的に用いられていたἄρχων，ἡγεμών，στρατηγός，προστάτηςは教会における指導者を表現するためには避けられている。A.D.クラークの「『指導者』という一般的呼称は，ほとんどの場合，初期キリスト教共同体に関連して用いられていないか，あるいはその本質は明確に再定義され，あるいは意味が緩和されている」との結論は妥当である。

5-3 「監督」以外の最初期教会の指導者たちの呼称

パウロがある特定の個々人を表すために用いた言葉は，縦方向へのヒエラルキーを示すよりも，水平の兄弟・姉妹関係を表現する「同労者・協力者」（συνεργός）という用語であった。この用語は，教会内部におけるいかなる格付けも反映してはいない。むしろ，Ⅰコリント5：5〜9が示すように，そのような格付けそのものに反対して用いられている。

次に良く知られた働きの担い手は，「預言者」（ὁι προφῆται，ὁ προφητεύων）であり，新約聖書には8回用いられ，特に，Ⅰコリント12章と14章に集中している。これは旧約聖書の預言者というより，初期教会のコンテクストにおいて，霊の自由に導かれて預言活動をした者たちを意味しているが，異言を語る熱狂主義的な者とは区別されている。

「教師」（διδάσκαλος）のタイトルは4回用いられ（Ⅰコリント12：28，29），「奉仕者」（διάκονος）は，一般的に教会に奉仕するという関連で7回登場し，これらの内の4回だけが任命された職務である「執事」を意味している。（ローマ16：1，フィリピ1：1，Ⅰテモテ3：8，12）E.ケーゼマンは，パウロの信仰共同体は，キリストの体である教会に働く霊とカリスマによる共同体であり，それらが熱狂主義には結び付かず，「奉仕」（διακονία）と結びついていると主張していることは重要である。また，「彼（パウロ）にとって真正のカリスマの実証は，何か超自然的なことが生じるという事実の中にではなく，カリスマ

のふさわしい使用のあり方にある。いかなる霊的資質もそれ自身で価値や権利やあるいは特権を持つのではない。それは，それがなす奉仕（Dienst）によってのみ妥当性を与えられる」という主張も記憶しておくべき言葉である。

さらに，登場頻度の多い用語は「使徒」（ὁ ἀπόστολος）であるが，パウロは，この称号をルカ文書の基本定義のように生前のイエスと共にいて，復活の証人となった者でも，教会の権威としての称号でもなく，語義が本来示すように，福音宣教のために「派遣された者」として捉えている。このような理解に，教会の権威構造以上に，霊の自由と福音宣教の使命，奉仕を重視したパウロの信仰の特徴がある。以上のような短い考察からも明らかなように，たとえ後代の教会史の発展を是認するとしても，新約聖書におけるパウロの教会内のタイトルに，手紙内のそれらの使用が暗示しうる以上のより大きな重要性（ヒエラルキーを促す方向性）を与えることは避けるべきである。

5-4 「エピスコポス」の意味

「全体を見渡す者」（overseer）あるいは「監督」（bishop）と翻訳される「エピスコポス」という用語は，新約聖書において５回用いられており，パウロ文書では，フィリピ１：１に一度複数形で登場するだけである。牧会書簡では，Ｉテモテ３：２とテトス１：７に用いられている。そして，これに関連した ἐπισκοπή は，Ｉテモテ３：１に登場する[89]。そして使徒言行録20：28では「長老」と交換可能なかたちで「監督」が登場する。また，Ｉペトロ２：25にイエス・キリストが「エピスコポス」と告白されている。

5-4-1　イエス・キリスト自身が，「魂の牧舎であり，監督者である」と告白され，「監督者」は「牧者」とほとんど同義語であり，また，教会の「監督」の働きが，イエスのような僕としての「牧者」の働きに根ざし，このお方を指し示す働きであることが示されている。

89　『ギリシヤ語新約釈義事典Ⅱ』64 によると，新約聖書におけるエピスコペーの使用は 4 例で，そのうち 2 回はルカ文書であり，Ｉテモテ 3：1 以外ではＩペトロ 2：12 である。また「異読」として 5：6 が挙げられている。

5-4-2　世俗的ギリシヤ文化における「エピスケプトマイ」,「エピスコペオー」

新約聖書の「エピスコポス」理解のためには，世俗ギリシヤ語，七十人訳，ユダヤ教における「エピスケプトマイ」,「エピスコペオー」という動詞と名詞「エピスコポス」の意味を知る必要がある。

世俗的ギリシヤ語の動詞は，1）見ることが基本で，誰か，何かを見渡すこと，見学，視察すること，観察すると広がる。神々がこの世界を見渡したり，王や指導者が国や街を見張っていれば安心であるという用例がある，2）何かを反省熟慮すること，そこから「何かを吟味・査問すること」に発展し，3）最後に「訪問すること」を意味する。教会の「監督」の仕事として「訪問する」奉仕が含まれていることは重要である。

5-4-3　七十人訳における「エピスケプトマイ」,「エピスコペオー」の意味

七十人訳では,「訪問すること」,「観察すること」「探すこと」の意味に「関心を持ち，世話すること」の意味が加わり，羊飼と監督の働きが結合され，神あるいはメシアの働きとして期待されるようになった。

さらに，この用語は「調査する」を意味し，神がイスラエルの民を審判と恵みのために「訪れる」という思想に発展するが，バイアーはこの動詞が「七十人訳においてある宗教的な意味を持つのは，神がその行動の主語であるときのみである」という。また，この動詞は,「誰かを任命し，委託し，就任させること」を意味するが，この用法が「キリスト教会に指導者たちを就任させることに一役買ったかも知れず，たぶん，その会衆指導者たちのためにἐπίσκοποςという称号を選ぶに影響を及ぼしたかもしれない」と指摘する。しかし，注意すべきことは,「神的訪問の考え方に加え，訪問，特に，病人の訪問はラビの倫理においては重要である」ことである。

5-4-4　新約聖書における「エピスケプトマイ」,「エピスコペオー」の意味

次に，新約聖書におけるこの動詞には，1）貧しい者，病気の者を訪問すること，2）相手に深い関心を持ち，他者のために責任を果たそうとすること，そして，3）誰かを「職務に任命すること」，4）そして，神の「訪問」の意味

がある。

5-4-5 「エピスコポス」の働き

次に,「エピスコポス」であるが，聖書以外では,「見張る者」,「保護する者」,「パトロン」として「監督する者」の意味があり，神々がそのような働きをするという意味で多少，宗教的含蓄がある。公的職務としては，都市国家の「官僚たち」，外交官的統治者などを意味していたが，彼らがいかなる仕事をしていたのかの厳密な定義はなく，漠然と,「監督」あるいは「管理の仕事」と関連していた。グニルカは,「それでも，殆ど常に含まれている表象は，その職務が何か監督的な，少なくとも管理者的なものであった」と理解している。

七十人訳においても「エピスコポス」は世俗的ギリシヤ語と同じように，二重の仕方で，つまり，一方では神について，世界を「見張る者」，他方では，いろいろの分野における「監督者」という意味で用いられている。

新約聖書の「エピスコポス」は，家の教会を主宰し，管理する者であり，神学的に重要なことは，一般の「群れに心を配り，管理する働き」に，特に，群れの中で尊敬を勝ち得る，み言葉を「教え」，道徳的に「訓戒する」働きが含まれていたかどうかである。クラークは,「監督」の働きが，あくまで「家の教会」の主宰・管理であるが，み言葉の教えと訓戒を含んでいたと見做し，初期パウロ以来,「監督」が徐々に教える「長老」と重なってくることを否定しない。

5-4-6　指導する者：「プロイェスティーミ」の働き

この研究論文で特に，教えられたことは，職務のタイトルではないが,「監督」,「長老」,「執事」の働きの根底に流れる「プロイェスティーミ」の概念である。これは「前に置く」という基本的語義から,「指導すること」を意味するようになったものである。まずは,「家庭をよく治め，子育てすること」である。それは「家の教会」のために「労苦すること」であり，そこに,「保護すること」,「防御すること」,「支援すること」などが加わる。「指導すること」が，主のために「労苦すること」と結びついていることは大切な示唆である。

そしてこれらの働きを「み言葉」を語り，家の会衆の日常性格の中で訓戒することを伴って行うのである。

5-4-7　当時の教会の状況

「エピスコポス」を中心とした教会の指導者のタイトルに関するこの分析は，「小さな家の教会」と「家」（household）という当時の社会的，文化的，教会論的背景がこれらの指導者たちの役割と起源の理解にとって本質的な前提であるという結論に達した。そして，当時の家の教会の状況は多様であったということである。そして，家の教会には，規模に応じて「全体を見渡す者」に加え，この論文では取り扱っていないが，「執事たち」がいる場合もあったろう。「全体を見渡す者」は，み言葉の教えと倫理的訓戒という付加的な課題を担う点で執事たち以上の重要な責任性を持っていた。彼あるいは彼女は，ある家の全体的な仕事を果たす頭であり，見張る者に要求されたある能力は，コミュニケーションのスキル（熟練）であり，「教えることと管理することを穏健な仕方で行使する能力」であった。

ある地域の家の教会の集合体が大きくなるにつれて，各「家の教会」の主宰者である「監督」は「長老たちの協議会」の一会員として認知されるようになったことであろう。「長老」についてはこの小論で扱わなかったが，「長老たち」とは集合名詞であり，基本的に「家の教会」というより地域の「長老会」を構成するメンバーであったと推論される。だから，ただ単一の家の教会に集まる信徒たちの小集団は，長老が存在しない場合もあったろう。最初期のフィリピのように，各「家の教会」には彼の家で会合をしていた教会を統括していた「監督」が存在していた。ある街で，「家の教会」が更に増加し，成長した段階では，これらの監督者たちは，より広い地域をカバーするため，「長老会」を構成するようになる。その場合，各々は家の教会レベルでは，「監督」でありながら，長老会においてはその構成員である「長老」でもあったろう。あるいは家の教会の主宰者ではあっても，長老会のメンバーでない人もいたかもしれない。さらに教会が発展すると，特に，使徒的監視が弱い地域においては，長老たちの会議の中で，その街のあらゆる家の教会を指揮する全体的な責任者が必

要となったであろう。彼が単一の「監督」という呼称を持つとき，多数の監督たちの存在とその呼称は，つまり，個々人の「家の教会」を統括する監督の名称は背後に退いたことであろう。イグナティオスの手紙の状況は，このようなプロセスの最後の状況であり，テトス１：７の，長老たちの間から一人の監督を任命すること，また，Ｉテモテ５：17の長老たちへの言及もそのようなプロセスの途上にあったのかも知れない。

5-5 「家の教会」の指導者

教会における指導性を考えるとき，「家の教会」への視点が重要であり，そのような状況の中での指導性を考えねばならないことが了解できた。M. F. Saarinen は The Life Cycle of A Congregation[90]の中で自我の発達サイクルを教会の生に応用し，教会は，1）E（エネルギー），2）P（教会のプログラム開発），3）A（指導者の管理能力），4）I（人間関係あるいは包括力）の四つのバランスによって発展すると言っている。つまり，教会が大きくなっても「家」としての牧会能力（包括力）がなければ教会は衰退し，また，それがなければそもそも大きくはならないと考えている。プログラム開発能力，PDC（計画 → 実施 → 評価）プロセスの運営能力が卓越していても，会員同士の葛藤を創造的に展開するコミュニケーション能力と温かい人間的交わりを確保する視点がなければ，教会は教会として立ち行かない。

また，A. J. Rothauge は Sizing Up A Congregation for New Membership Ministry[91]において「家族的教会」，「牧師主導的・牧会的教会」，「プログラム教会」，そして「法人組織的教会」がなぜ新入会員を引き付けるのかに沿ってアウトリーチ方策を提言している。つまり，基本は「家族的な教会」なのである。そこに，牧会力，組織力，管理能力が加わると「牧師主導・牧会型教会」に発展し，そして「プログラム教会」，「法人組織的教会」へと拡大するのであるが，実は，教会は，「家族的教会」を幾つか「連結すること」によって大きくなって行く

90　An Alban Institute Publication. 出版年不明。

91　New York/The Episcopal Church Center. 参照，C. S. Dudley and D. A. Walrath, Developing Your Small Church’s Potential. Valley Forge/Judson Press, 1988.

のである。要は,「家の教会」を主宰する的確な牧会＝み言葉を媒介にした人との寄り添いが出来るかどうかにすべてが掛っているのかも知れない。最近出版された，David Stark，Christ-Based Leadership も一般企業の経営学の方が硬直化した教会組織よりもはるかにこのような方向に進んでいることを示している[92]。牧師自身を含めて一人一人を，そして，群れ全体をみ言葉に促されて「関心をもって良く見ること」，この働きが重要である。これが，この「エピスコポス」（監督）を巡る小論の結論である。

92　Bethany House, 2005.